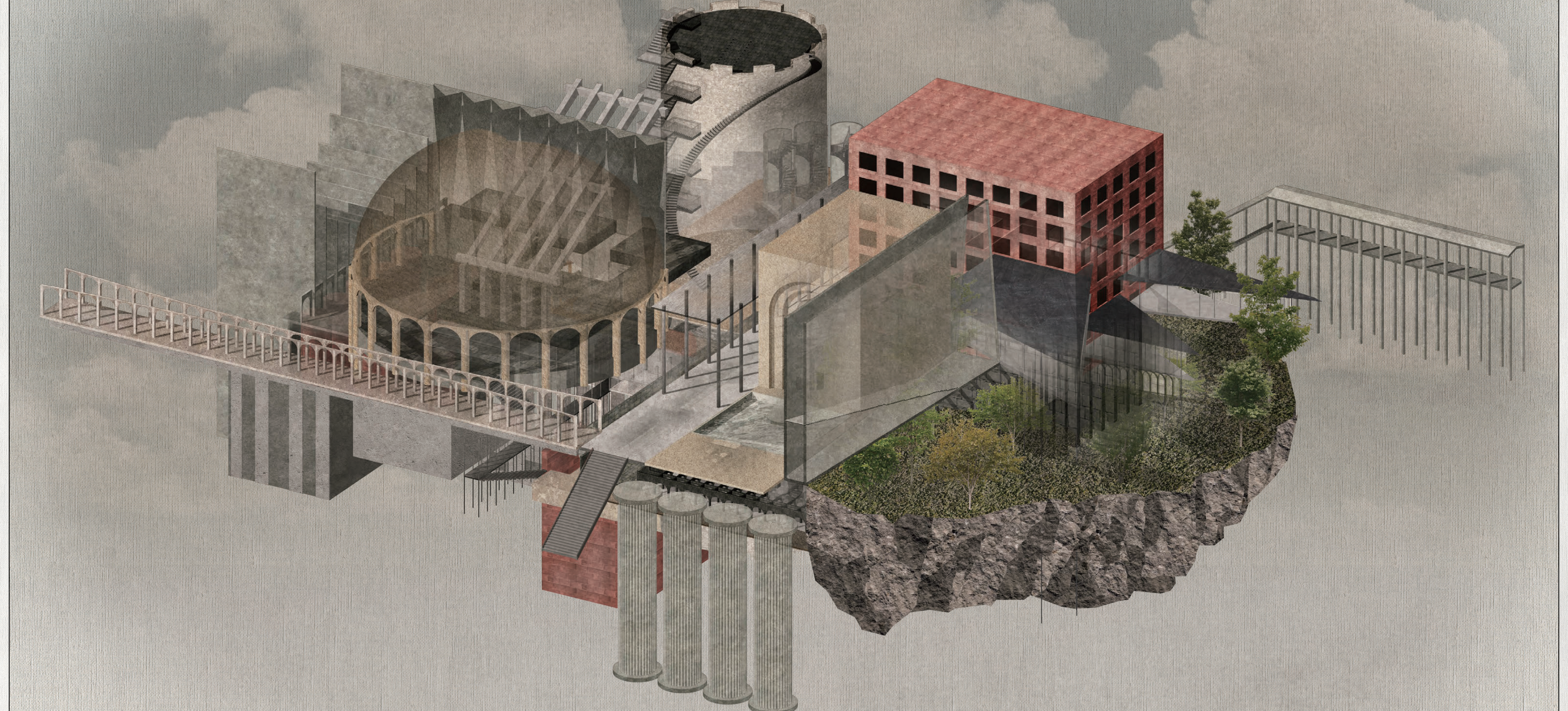
建築家 の 自画像

―形になる前のカタチを紐解く―



建築設計において、敷地条件などの外的要因以外にも、建築家の手癖として捉えられる内的要因が形態に現れる。

「あの人は狭い空間と広い空間をよく交互に配置している。」　「なんとなく、斜めにした壁をファサードに使ってしまう。」

この内的要因のみから生まれる建築を考えたとき、それにはどんな力があるのか。

これは私にしか描けない私、「自画像」を紐解く試みである。

Ⅰ Background

私たち学生を含めて建築家は、敷地や機能や依頼者の条件といった与えられた問いに対して、自らの答えを建築物で示す。

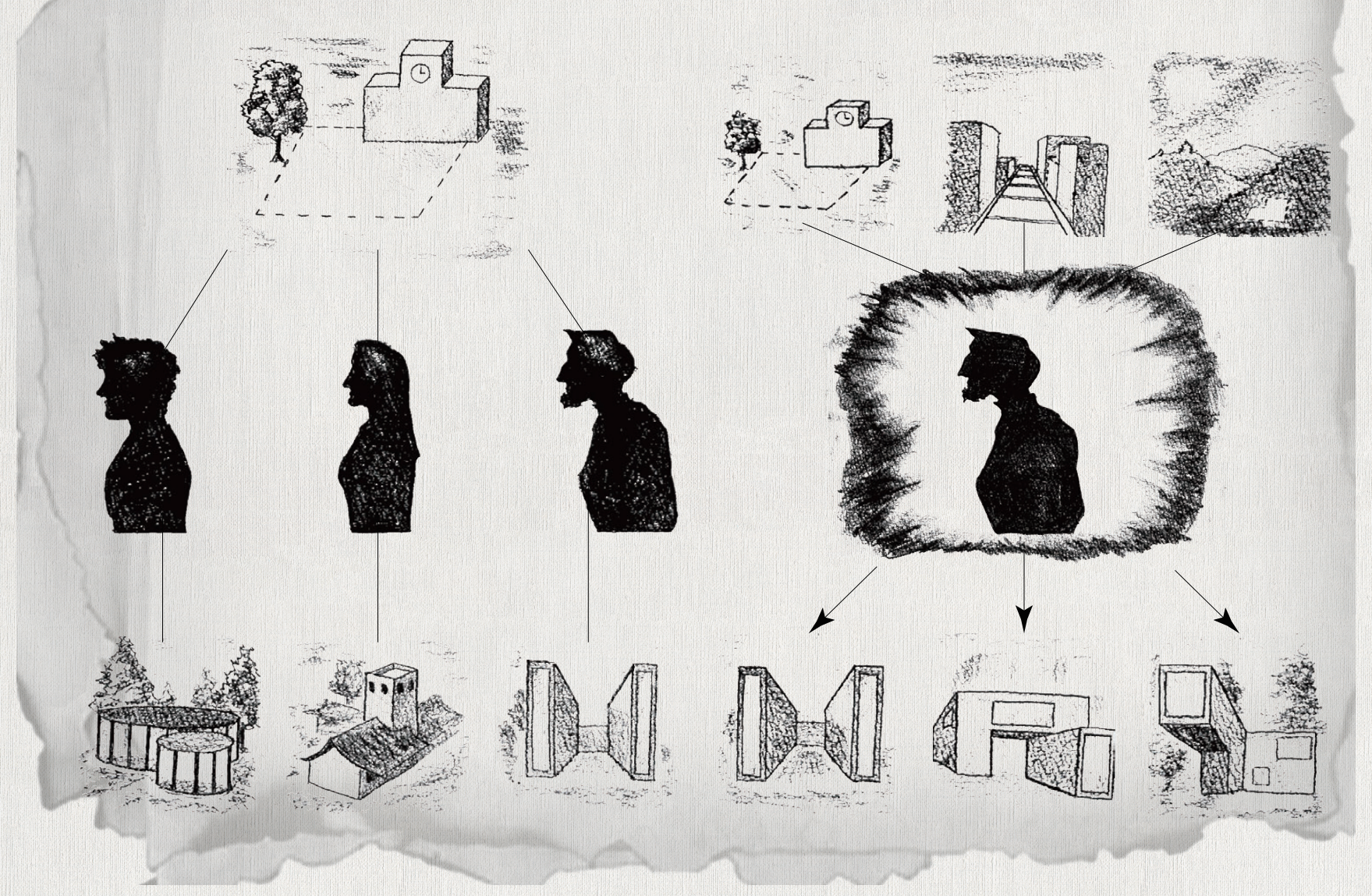
しかし、それは同じ条件でも出てくる答えは人によって異なる。

与えられた客観的な条件のみが
建築物の形を決定する
わけではない。

そして、ある一人の建築家に注目したとき、与えられた問いは全く異なっていても、そこにはしばしばその人“らしさ”が現れることがある。

それは意図的にそう設計した人もいれば、本人さえ気付かないまま似通っていたこともあった。

しかし、私たちはその“らしさ”
を手癖として捉えそれ以上
踏み込まないのである。



Ⅱ Hypothesis

建築設計において、建築物の形態を決定する要因は、〈外的要因〉と〈内的要因〉に分けられると考える。

外的要因：
敷地や要求、機能 etc...

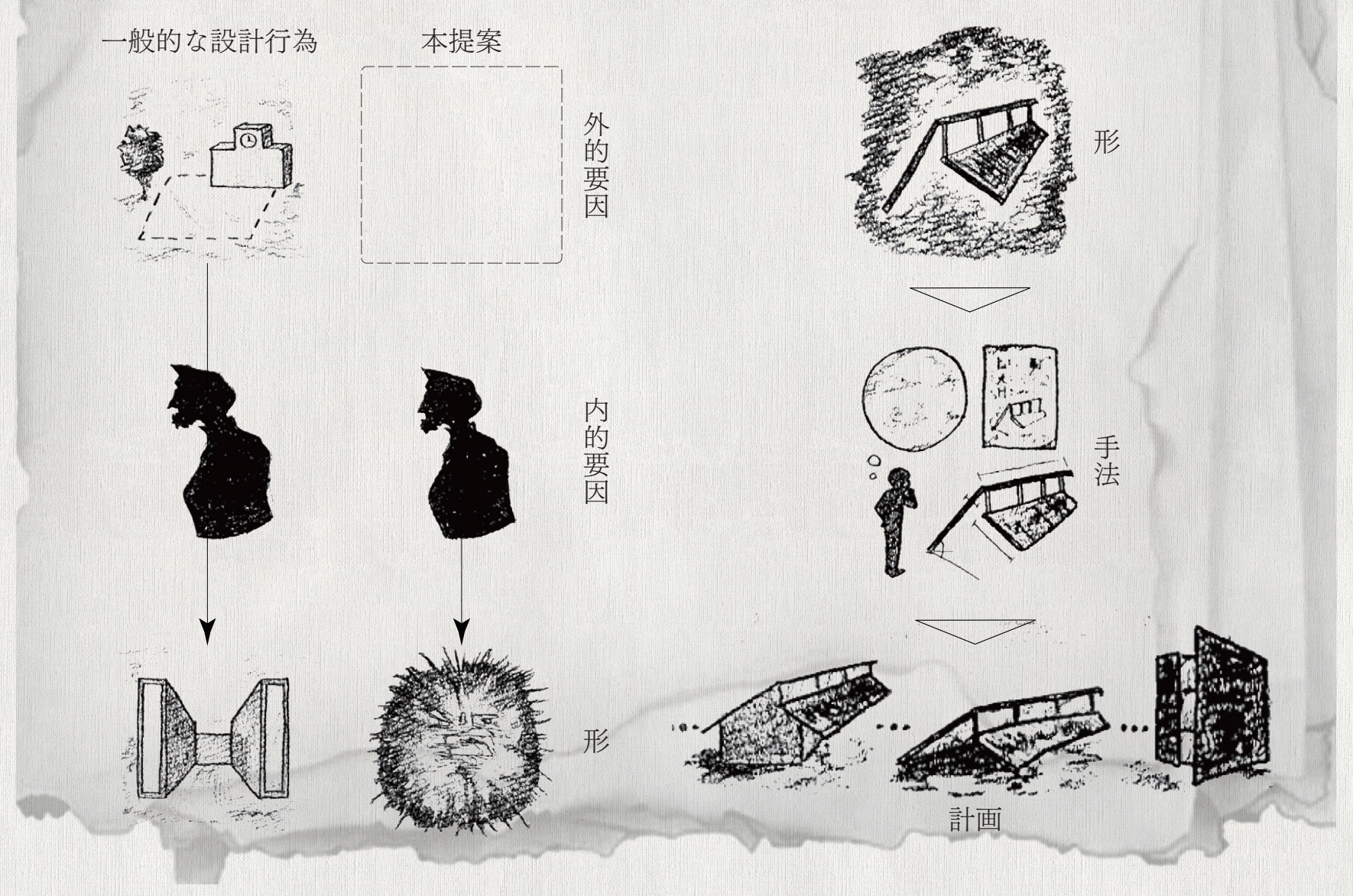
内的要因：
建築の記憶と身体に刻まれた
空間認識の特性

建築家は外的要因を自身の内的要因に通すことで設計を行う。

ここで、内的要因のみによって構成された建築を考える。

それには、建築家の“らしさ”の根源、「形になる前のカタチ」が現れるのではないだろうか。内的要因とそれのみによって生まれた形を分析し、建築家自身の持つ確かな手法として蓄積する。

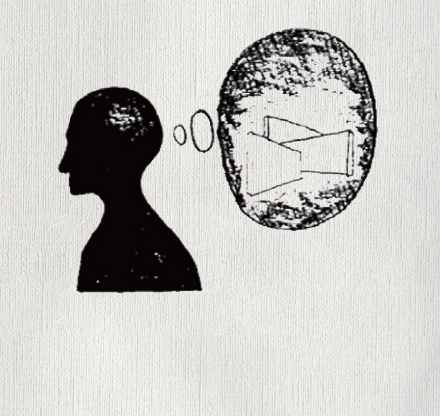
これは、建築の設計手法の
提案ではなく、
建築家の設計の確度を上げる
思考プロセスの提案である。



Ⅲ Method

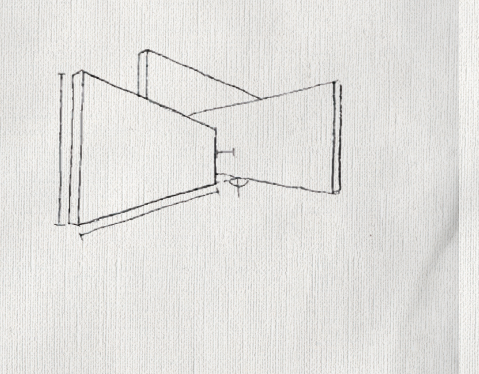
① まず、建築として成立させることを目的とせず、きわめて自由な状態で空間イメージを想起する。

この段階では、機能・構造・スケールの妥当性・実現性といった判断は意図的に行わない。



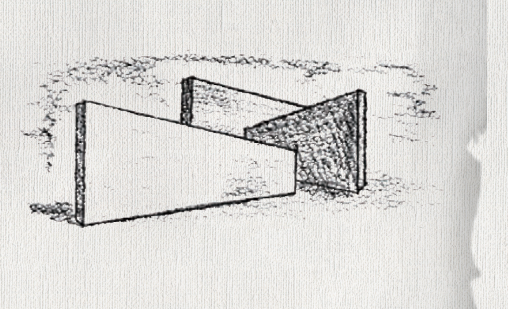
② 次に、想起されたイメージ空間に対して、寸法を与える。

ただし、その寸法は一般的な基準や法規によるものではなく、建築家自身の身体感覚に基づくものとする。

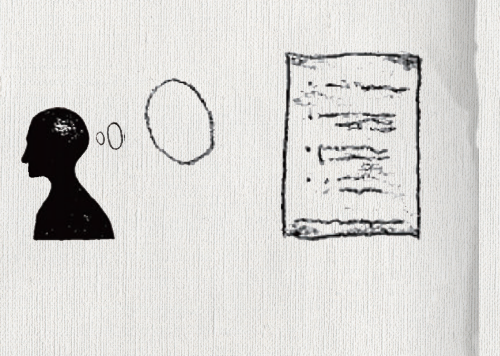


③ 寸法の与えられたイメージ空間を模型やモデリング等用いて、3次元の形を持たせる。

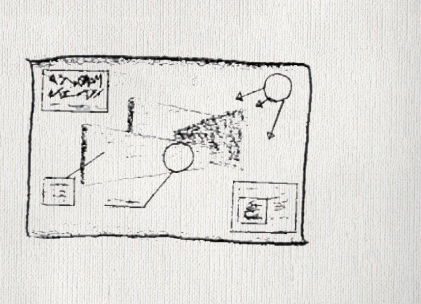
ここで、整合性のとれない部分や矛盾した構成が必然的に露呈することになるが、それらは修正するべき内容ではなく、内的要因が空間に現れた痕跡としてそのまま残す。



④ それによって生まれた空間に対して、客観的な説明と自身が抱いたイメージ情動を分析し記述する。

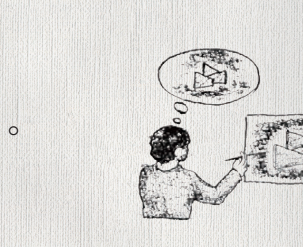


⑤ この一連のプロセスを積み重ねることで、自身が抱く空間認識の特性＜カタチ＞を考察し、現れた空間＜形＞を手法として蓄積することができる。

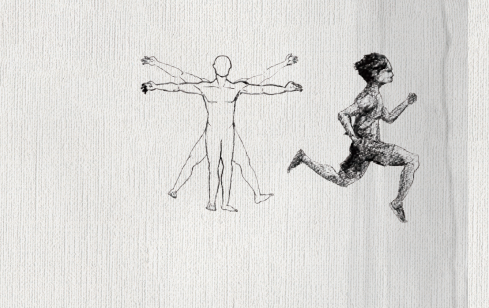


Ⅳ Case Study

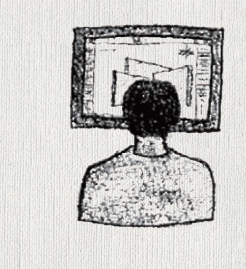
① 自由に建築空間を思い浮かべ、それをスケッチにとり記録する。



② 身体距離と力感距離を用いてイメージ寸法を与える。

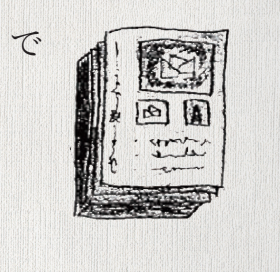


③ 与えた寸法を基に模型と3Dモデルを作り空間化する。

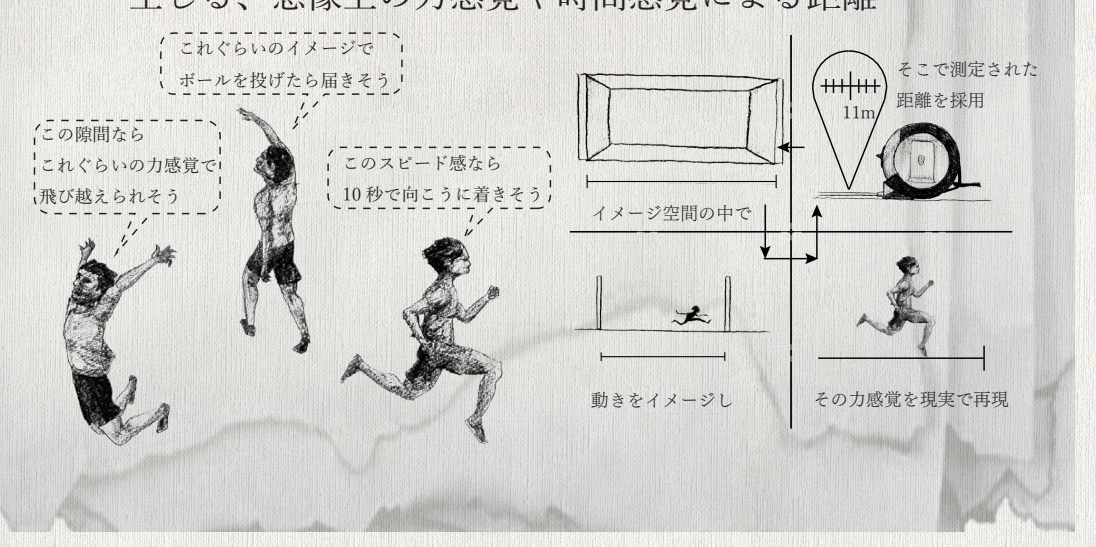


④ 素材や空間の広がりとその空間において抱くイメージや情動を記述する。

⑤ 一連のプロセスを連想することで繰り返し新たな空間を想起させ、蓄積を行う。



※ 力感距離
自身の身体的動作を置かれた状況に反映させたときに生じる、想像上の力感覚や時間感覚による距離


この隙間ならこれぐらいの力感覚で飛び越えられそう
これぐらいのイメージでボールを投げたら届きそう
このスピード感なら10秒で向こうに着きそう
イメージ空間の中で
そこで測定された距離を採用
11m
動きをイメージし
その力感覚を現実で再現

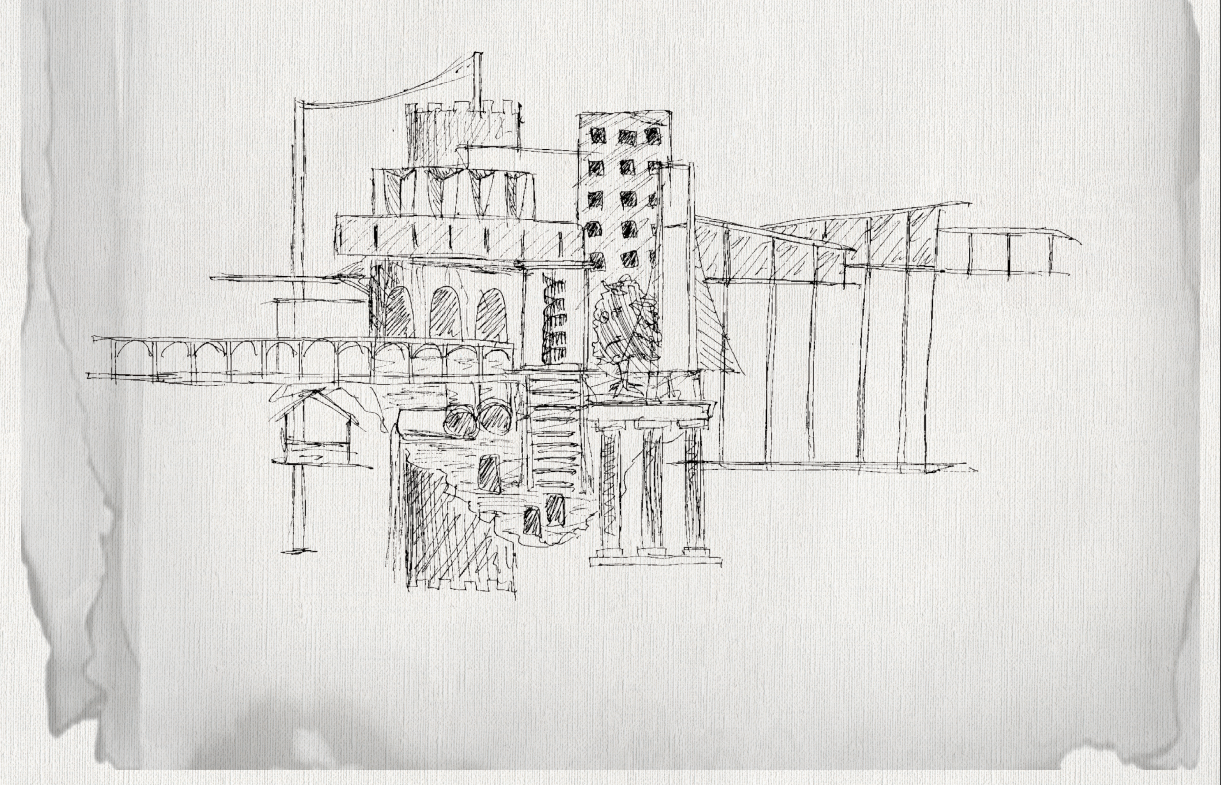
Ⅴ Finding

様々な〈形〉が発見されたが、〈カタチ〉の全貌を見出せたわけではない。

しかし、私は動くことで連想を行い、そこに記憶の中の形や心理的なつながりが、時間を超えて現れる。これが私の〈カタチ〉なのかもしれない。

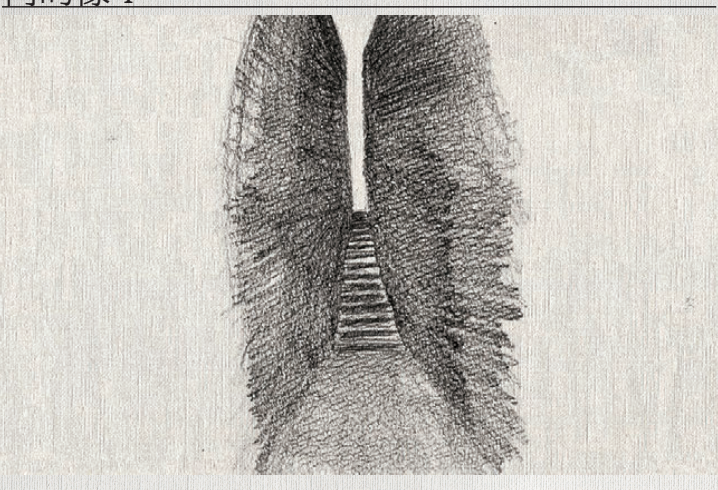
あるいは、人が鏡や写真を使わないと自分の顔が見えない、そして一度に自分の全てを見ることができないように、〈カタチ〉を捉えるのは不可能なことかもしれない。

だが間違いなく、私の〈カタチ〉から描いたこれこそが、現在の私自身の「建築家の自画像」であり、これからは手法として見え続ける。

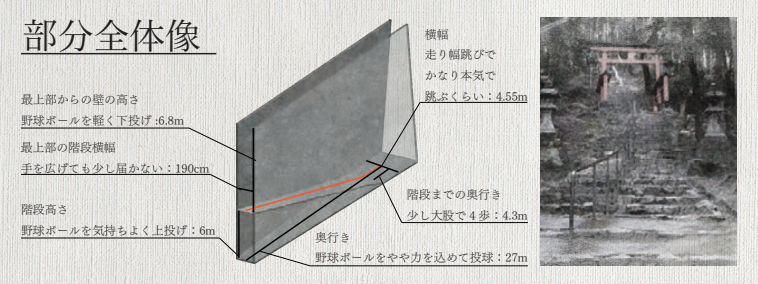


自由に建築空間を想起する。

内的像 1



部分全体像



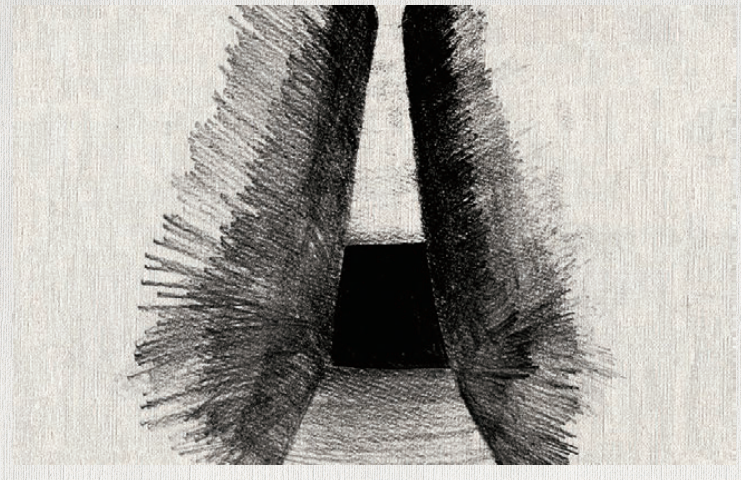
形
モルタル素材で左右の壁が奥に向かうにつれ間隔が狭まる。狭まる壁に階段をつける。上は開き垂直性を出す。

イメージ
薄暗さから強烈な光へ向かう。空間自体は閉じていくが、閉塞感から解放感を感じるギャップ。

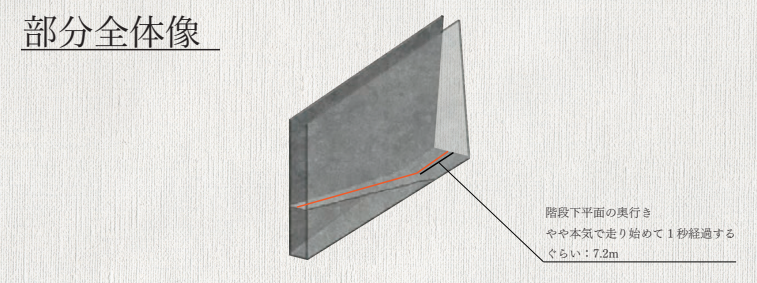
記憶
具体的な場所やモチーフは不明。少し開いた大きな扉から光が差す描写が近しい。

単純な形態連想。上下を光の差し込み方や空間の広がり、イメージで対比している。

内的像 2



部分全体像



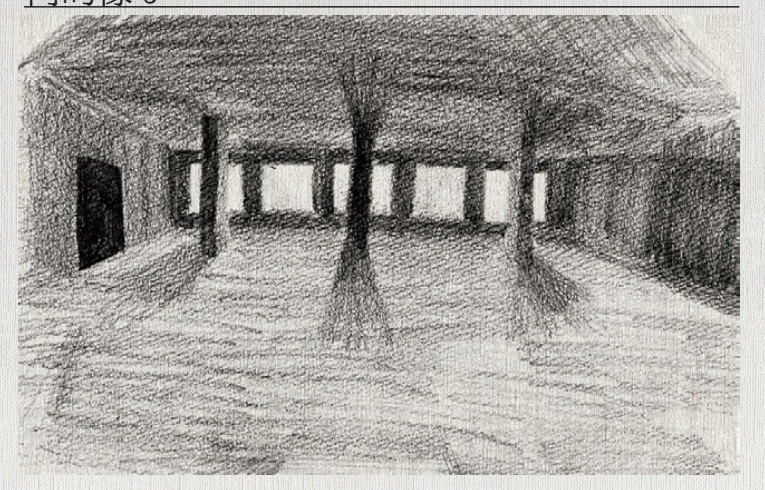
形
足元は広いが高くなるにつれ狭まる。左右の壁が光を反射させる。背後に光源を設ける。

イメージ
暗闇に進む緊迫感。広い空間に進もうとしているのに閉鎖的に感じる。不安に飛び込むよう。

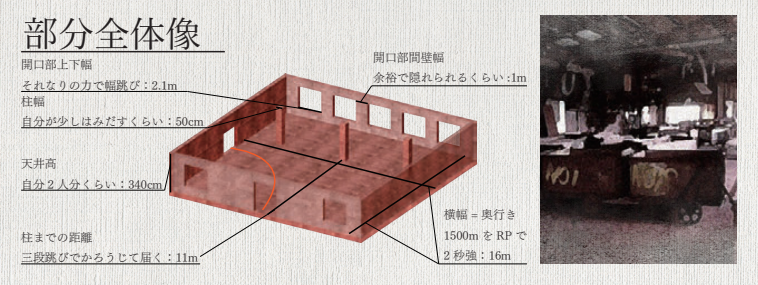
記憶
具体的なモチーフや場所は不明。人気のない明りのない部屋に入るイメージと似ている。

洗練された屋外⇔腐朽した屋内という空間的な対比が起こっている。

内的像 3



部分全体像



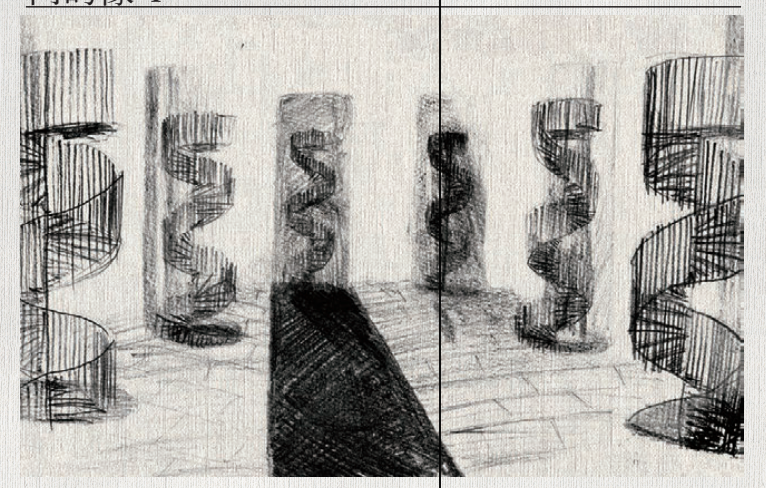
形
赤いレンガや赤さびで構成。正面奥にはやや大きめの開口部。角柱が三本、左右の間隔は同じで前後は異なる。

イメージ
人がいたようでいない。未知と既知の間。薄暗いが明りがある。すべてにおいて中途半端で不穏感。

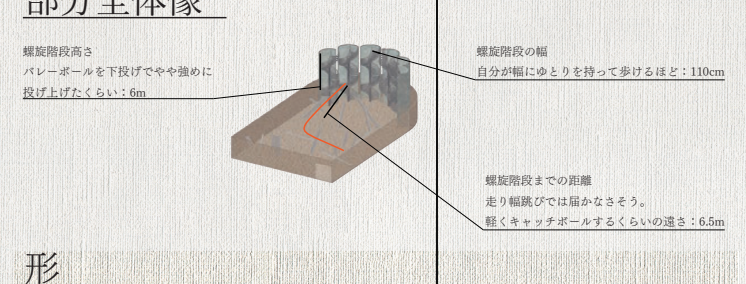
記憶
具体的なモチーフや場所は不明。ホラー映画やアクション映画の一コマにあったような気がする。

無人性と不安感で心理的な連想が行われていると考える。

内的像 4



部分全体像



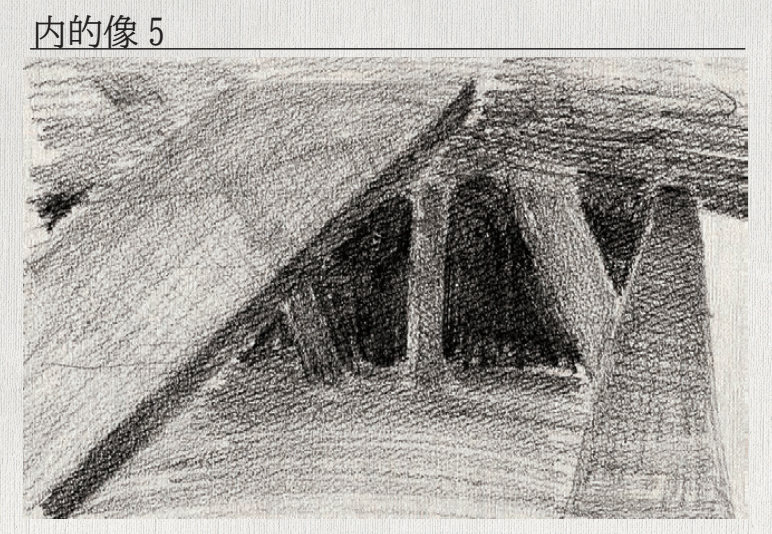
形
円形広場に6つの螺旋階段。螺旋階段には側壁がある。床の素材は石タイルで階段は黒い鉄。側壁はモルタル。

イメージ
奥行きがあるはずだが圧迫感を感じる。選択や決断を迫られている感覚に陥る。

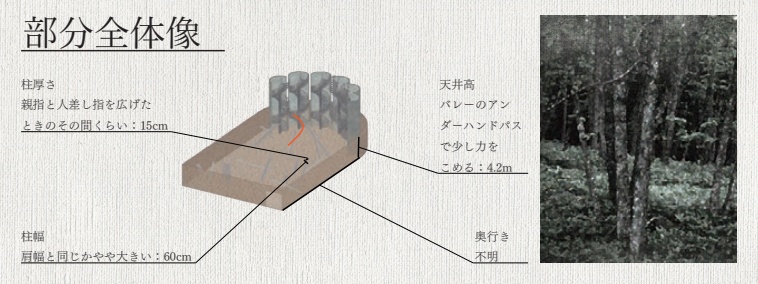
記憶
小学生のころ毎日のように遊んだ公園広場に広さが似ているが、上記のイメージを抱く理由は不明。

無人性と不安感という心理的な側面が螺旋階段の形態を介して薄暗い山奥の自然に連想されている。

内的像 5



部分全体像



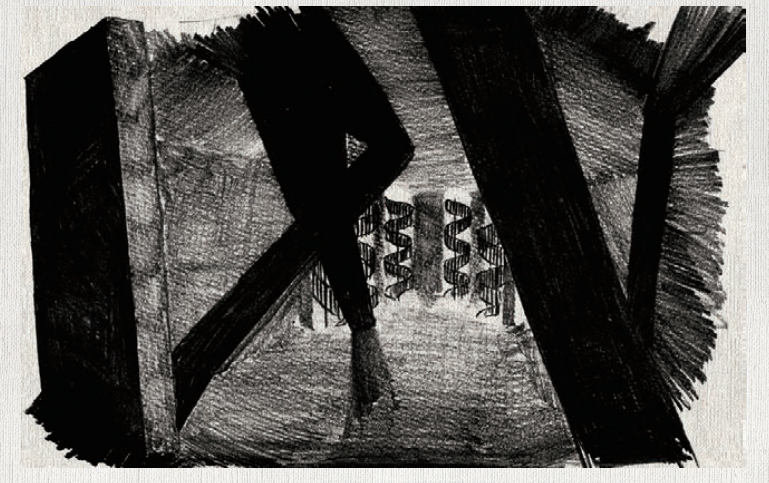
形
斜め掛けされたRCの柱が不規則に乱立している。屋内空間。左右は壁が少し視界にはいる。奥行きは不明。

イメージ
奥が見えないくらい深く、終わりのない迷路に陥った感覚。斜めの柱によって広さと狭さの両方を感じる。

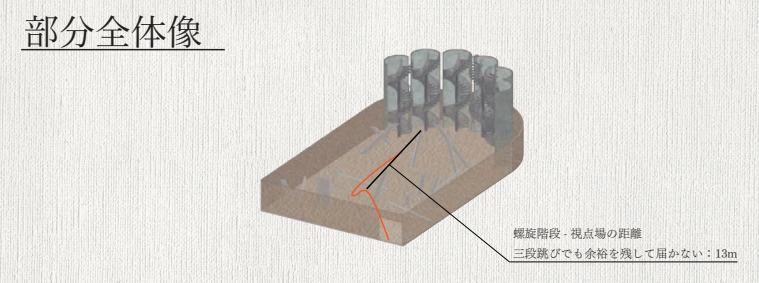
記憶
うす暗い森がおそらくモチーフで、小学生の頃にトカゲを探すために森の入り口あたりを時々散策していた。

シーン4、5の統合が行われている。ここでは振り向くという動作がされている。不安を制御しようとしているのではないか。

内的像 6



部分全体像



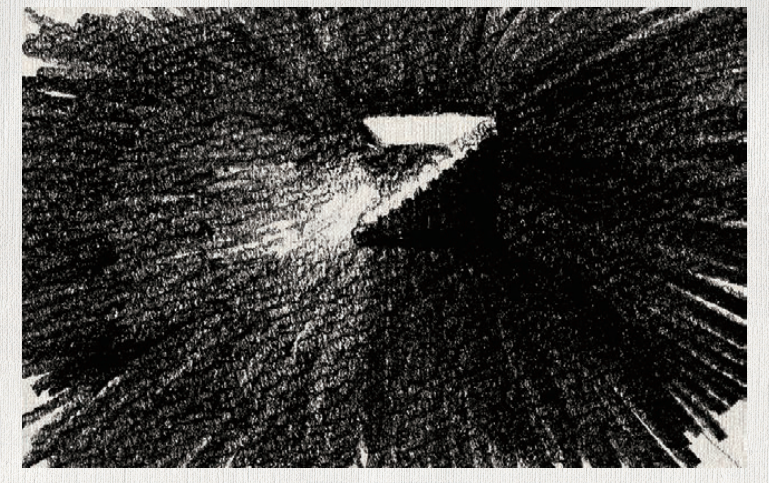
形
シーン5, 6の統合されたもの。

イメージ
奥の明りによってRC壁の影が印象強く伸びてくる。螺旋階段のほうに後戻りしたく感じる。不安と後退。

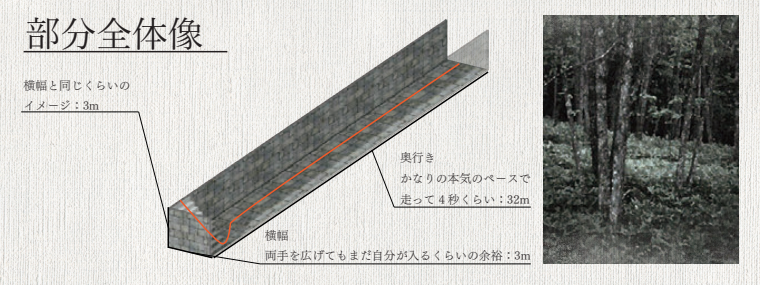
記憶
小学生の時、トカゲや珍しい虫を捕まえるためにツタや草木をかき分けながら道ではない道を進んだ。

不安→恐怖に心理的な連想が行われている。記憶の時期も類似しているので時間的なつながりも考えられる。

内的像 7



部分全体像



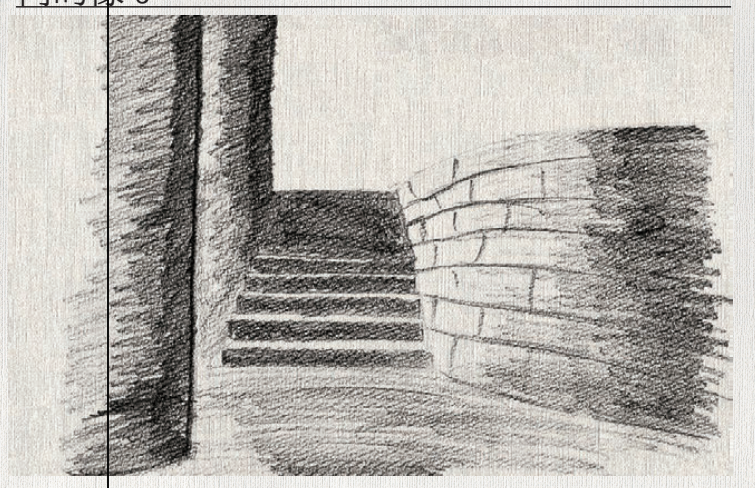
形
人が二人並べるくらいで、断面が正方形の黒いブロックの通路。その先には素材の異なる階段が一つ。右に上る。

イメージ
背後から迫る恐怖とそれから逃避する感覚。音が響きそう。階段に近そうで遠い感覚。

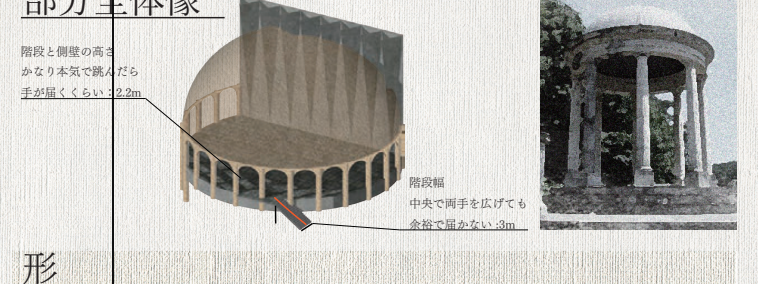
記憶
小学生に遊んだゲームのシーンで、村の自分以外の人間が襲われている中、独り地下で匿われていた。

逃避→安心という心理的な移行による連想。中世→古代という空間的なつながりもみられる。

内的像 8



部分全体像



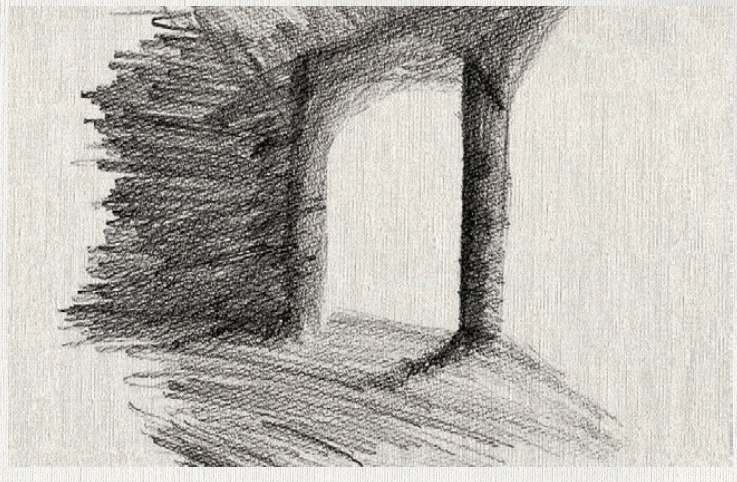
形
正面には頭より高い階段。左手には鼠色の円柱が連立、右には頭より高い黄色味の帯びた石の壁。路地のような空間。

イメージ
牧歌的な印象。少しの不穏さを感じるが、明るく陽気である種の楽園にいるような感覚。

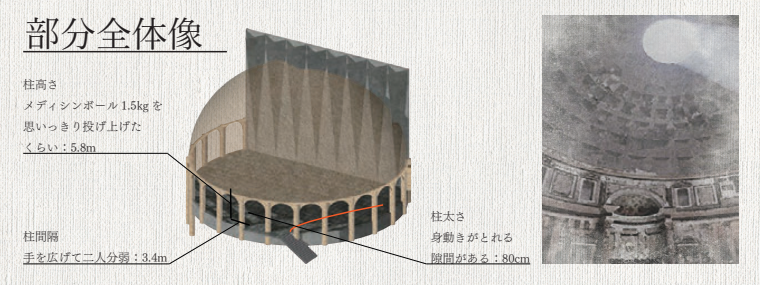
記憶
6年前に見たテルマエ・ロマエを思い出した。3カ月ほど前にそのロケ地となった銭湯に訪れた。

古代という面で空間的な連想が行われている。また、牧歌的や楽観的という心理的に類似している側面もある。

内的像 9



部分全体像



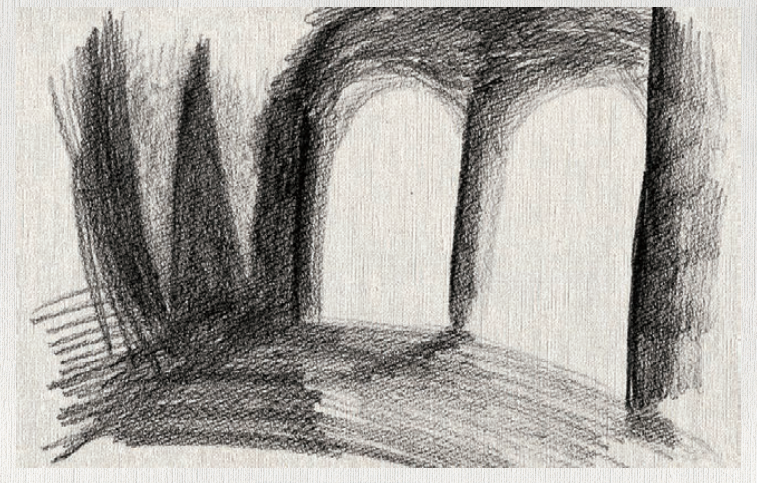
形
人の背丈の2-3倍ある太い円柱によるアーチ状の開口部が円弧状に広がる。天井はドーム状。

イメージ
懐古的な感覚。少しの楽観的な感覚に加え、開口部から光が差し、神聖さも感じる。

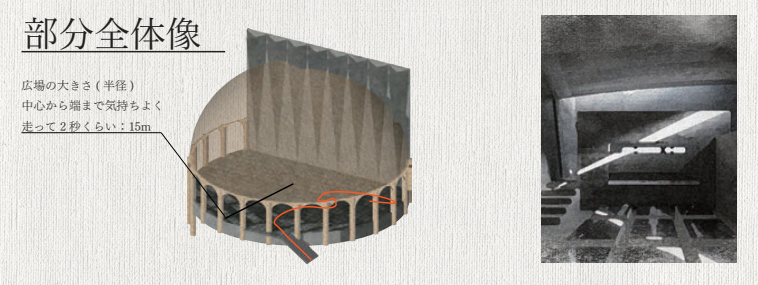
記憶
2年前に知ったパンテオンなどのドーム建築や2年前に訪れたJP京都駅のヨドバシカメラ前のアーケード

ドームという形態連想に新たなモチーフが加えられたことにより、雰囲気が大きく変わった。

内的像 10



部分全体像



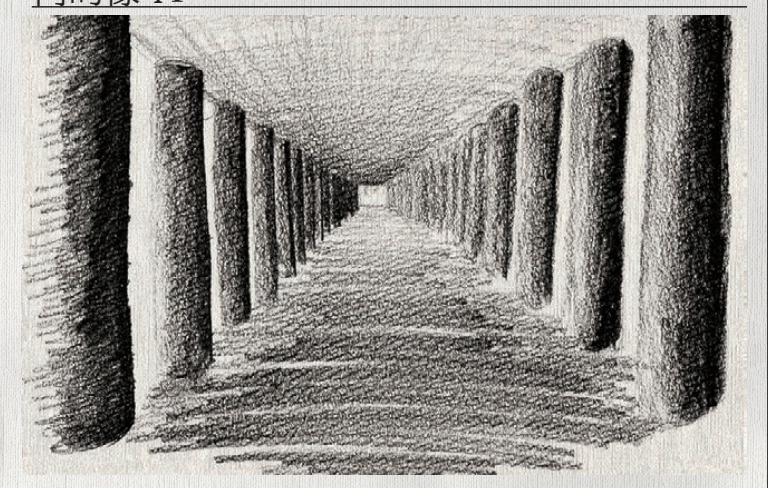
形
前回のドームに打ちっぱなしコンクリートによる壁面にスリット状で光が差し込む。

イメージ
無機質で不穏感に加え、音のない圧倒感と威圧感。温かみと冷たさの対比がされている。

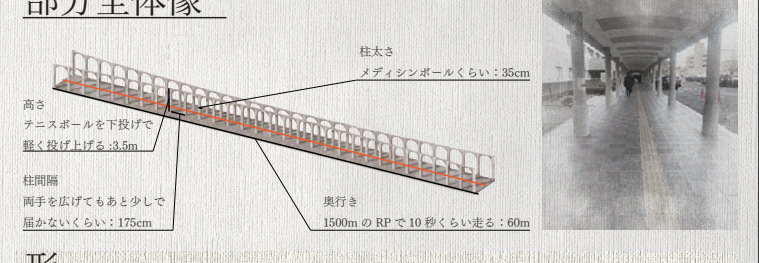
記憶
2年前に買った本にBourse de Commerceが特集されており、その壁面の絵画をそぎ落としたイメージ

モチーフに対する時間的な記憶と心理的なつながりがアーチという形態を通して連想された。

内的像 11



部分全体像



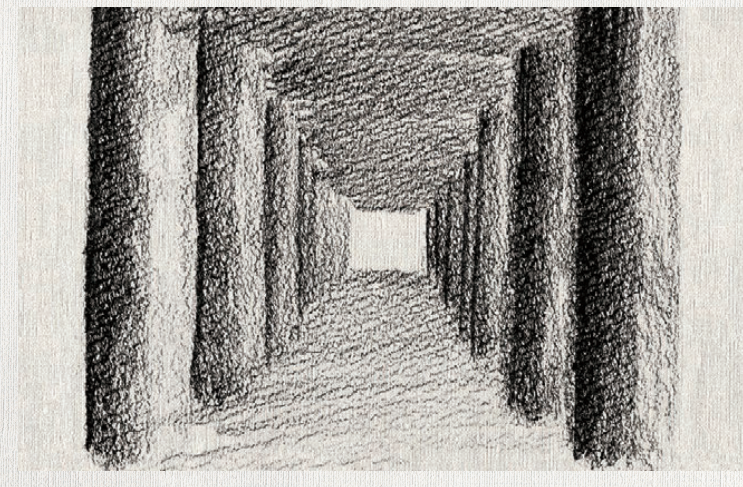
形
アーチ状の列柱廊でざらざらとしたモルタル調で仕上げる。床と屋根は並行で水平性を出す。柱間隔は人一人分。

イメージ
ただただ気持ちよく前進するイメージ。未知と期待感。肯定的な心理で、奥行きに目が行く。

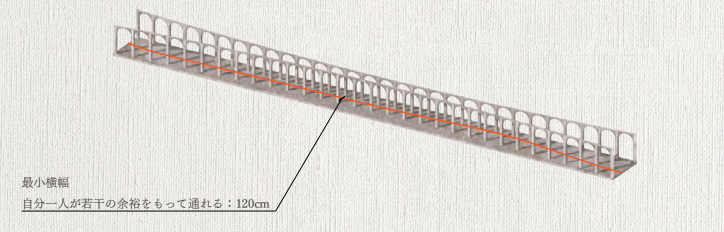
記憶
1年前から登校時に歩いている大学病院前の廊下で、ほぼ毎週ここを通っている。

11のモチーフを通る時、アーチ間から外を見るという習慣が表面化し、さらに心理的なイメージに近づいたと考える。

内的像 12



部分全体像



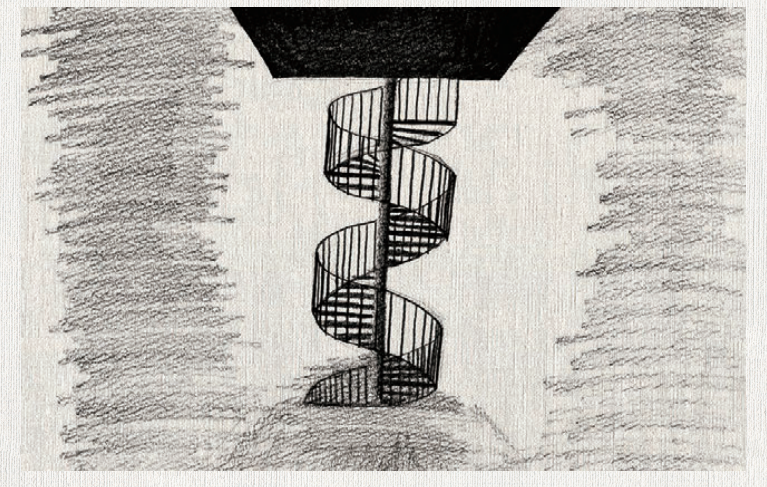
形
シーン11の左右の柱が内側寄りに曲線を描くように配置。

イメージ
進むにつれて緊張感があり、最も狭まった柱間を抜けると解放感がある。左右に目が行き、奥行きが錯覚的。

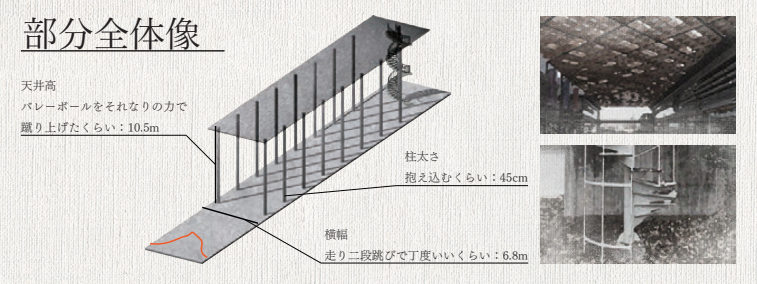
記憶
前回のシーン由来だが、この形に対する具体的なモチーフや場所は不明。

11と13のモチーフは同じ場所で、初めて経験した時期もおおよそ同じであるため、時間と場所で連想が起こった。

内的像 13



部分全体像



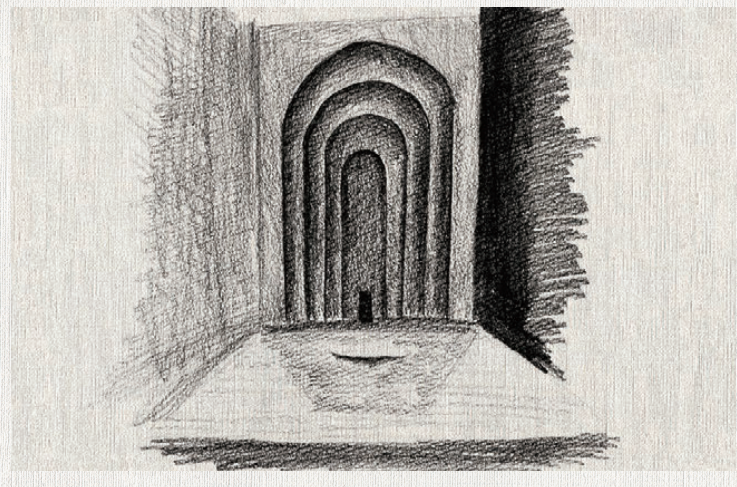
形
黒い鉄骨の円柱が平行屋根を支える。断面は縦長の長方形で、その奥には床から天井まで伸びる鉄骨の螺旋階段。

イメージ
洗練された雰囲気。大きなものに包まれているような安心感と無機質な素材による少しの不安感。

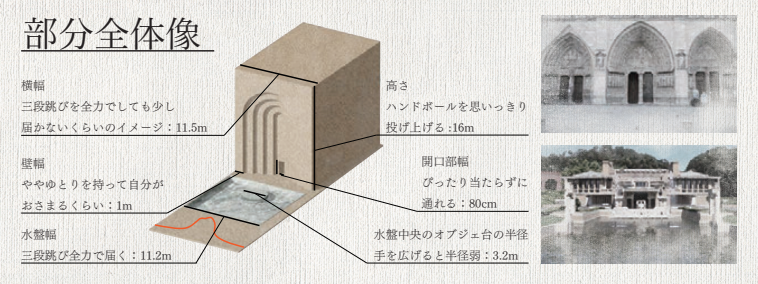
記憶
大学図書館横にある、高さ2.5mほどの螺旋階段に似ており、ここには3年前に授業で初めて訪れた。

現代⇔中世の対比はあるが、これらを知った時期や場所はおおよそ同じであるため、時間性による連想が起こった。

内的像 14



部分全体像



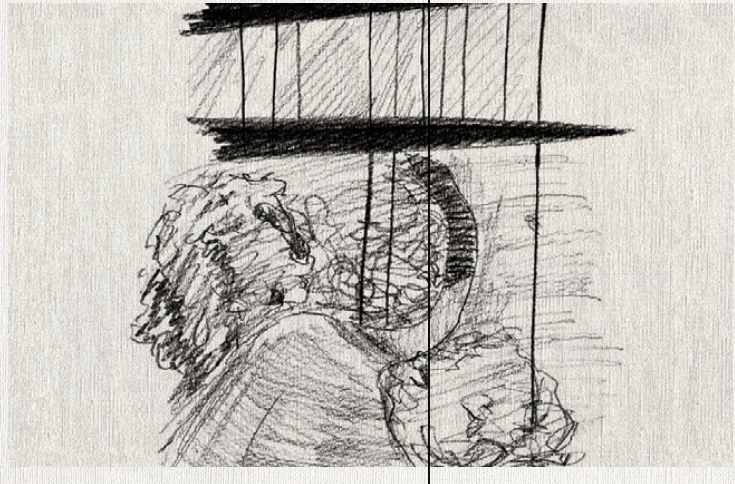
形
縦長の建物のファサードに半円のアーチが奥にいくにつれ小さくなるように連続して配置されている。石造り。

イメージ
懐古的な感覚に陥るが、同時に虚無のような、そこに佇んでいる静寂さも感じる。

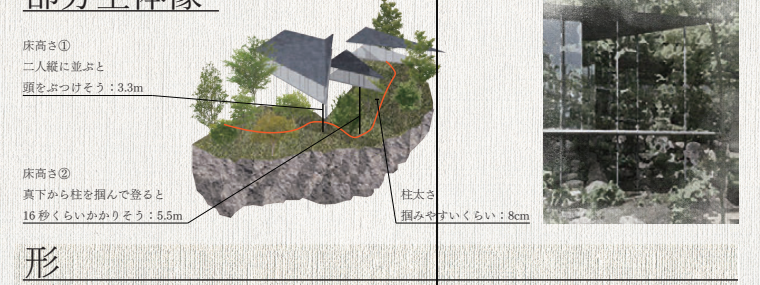
記憶
2年前に見た大聖堂のファサードや旧帝国ホテルのファサードに情感や形が似ている。

モチーフを知った時期はおおよそ同じであるため時間的なつながりが考えられる。

内的像 15



部分全体像



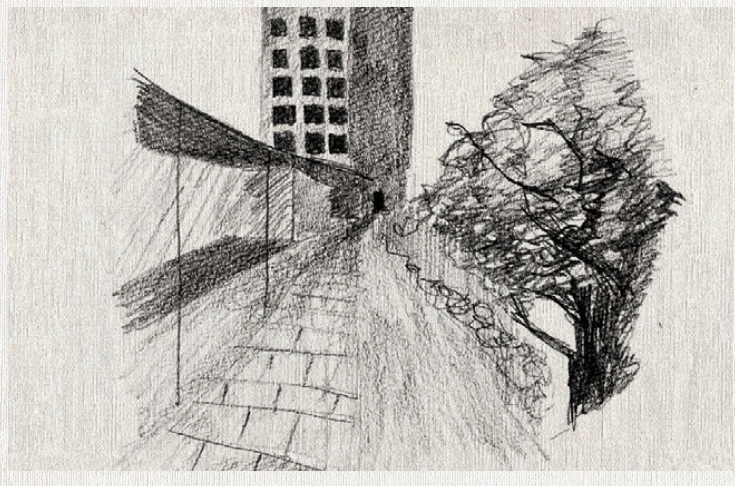
形
三角形の平行な床と屋根を持つガラス張りの構造体が、細い円柱によって足元の地面から高く持ち上げられている。

イメージ
建物までも自然に溶け込んでいる。建築とランドスケープが一体化している。明るく開放的。

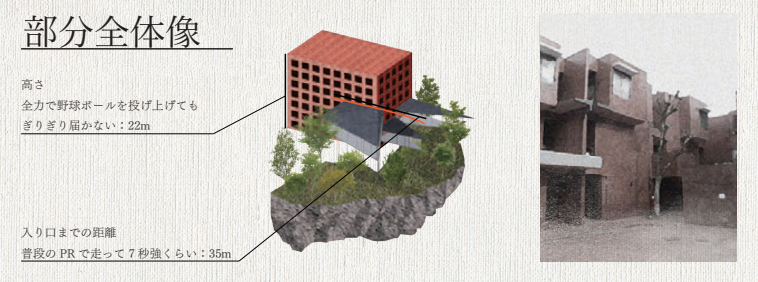
記憶
1年と少し前に友人と訪れた福武トレス。2年前から行きたかった場所で鮮明に覚えている。

前面は形態による接続が行われているが、背面についてはどのようにイメージが転換したのか不明。

内的像 16



部分全体像



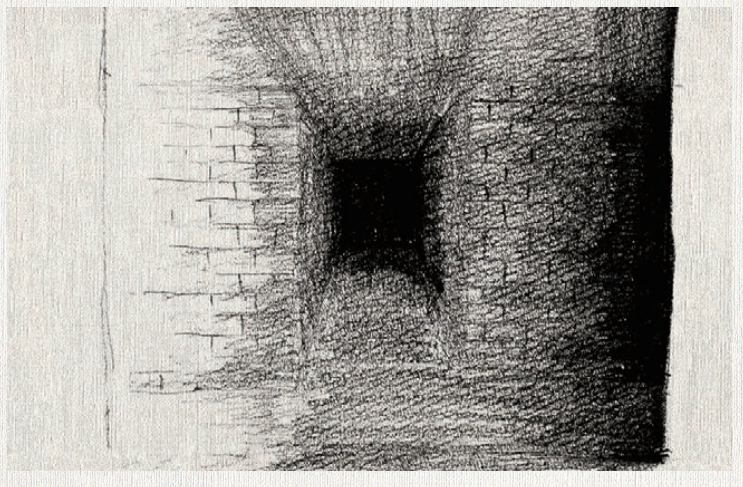
形
前回のイメージに加え、見上げるほどの高さ。赤いタイル調のファサード。大きな正方形の開口部が理路整然と並ぶ。

イメージ
既視感が強く、親しみを持てるような雰囲気だが、冷たさも伝わってくる。

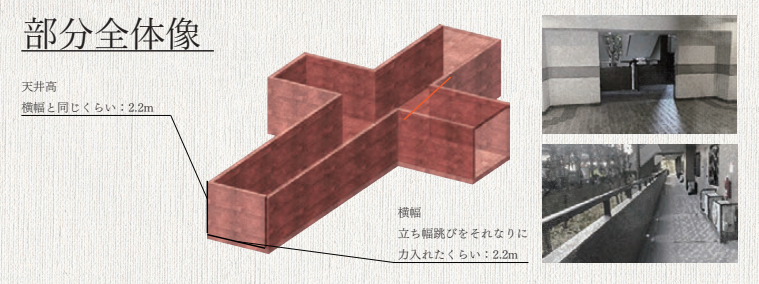
記憶
小学生時代に毎日のように遊んだ近所のマンションや、3年前に迷い込んだ嵐山の集合住宅を思い出した。

モチーフとなった場所や時間が同じであり、その場所に対する心理的な類似性が起因している。

内的像 17



部分全体像



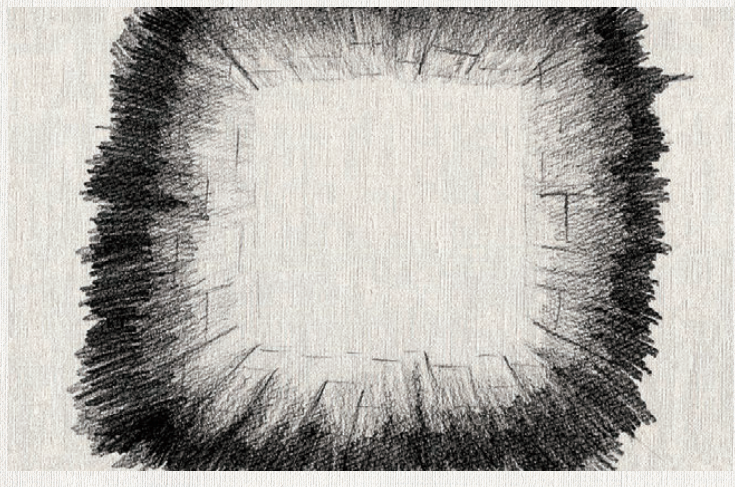
形
正方形の断面で、赤いレンガ調の壁面。十字に交差する通路で奥行きがある。

イメージ
やや不気味で見慣れない。明るい一つの通路と、暗い他の通路の分かれ道。遠慮感。

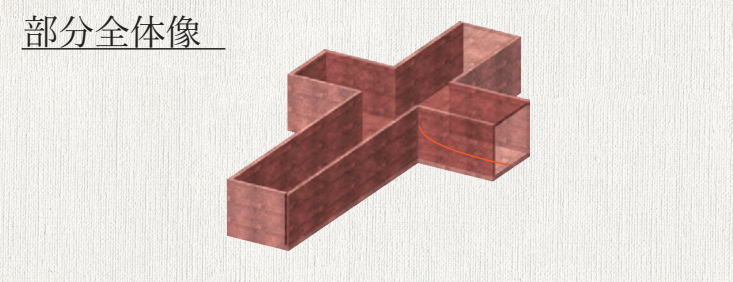
記憶
小学生時代に遊んだマンションのエントランス通路で、自分が他人だから物音には気を付けるようにしていた。

形態に関しては確かな類似性が見られるが、心理的なつながりについては不明。

内的像 18



部分全体像



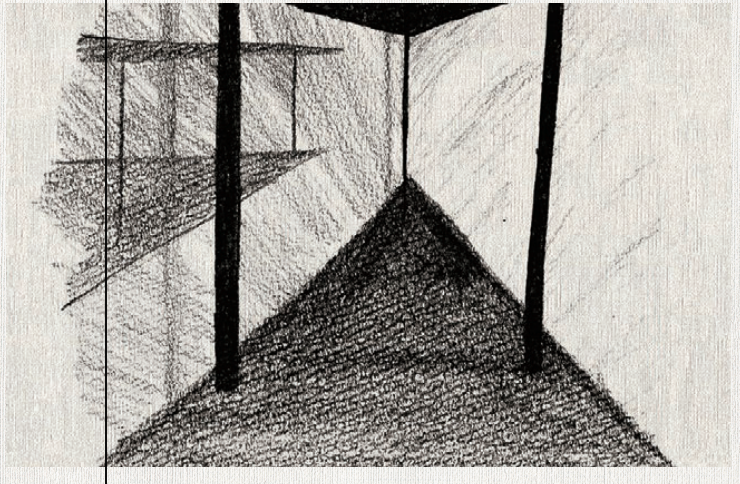
形
前回のシーン。

イメージ
不気味さを背景に眼前にゴールがあるという希望感と、そこに着く直前の満足感。

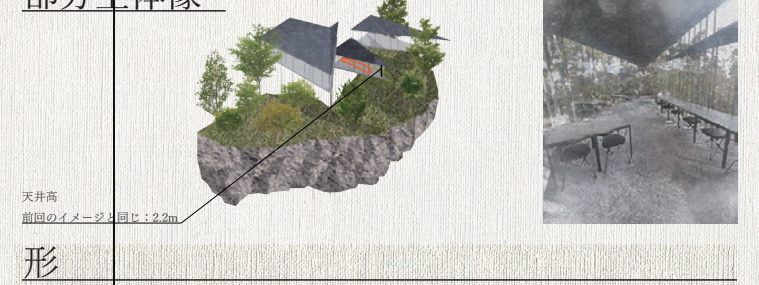
記憶
具体的なモチーフや場所は不明。

希望→達成感→解放感という空間に対する心理的なイメージによる連想が17〜19にかけて行われている。

内的像 19



部分全体像



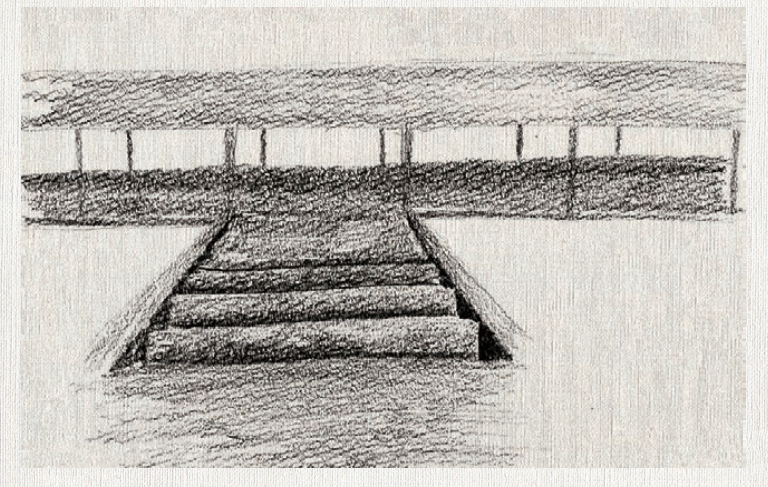
形
三角の平行屋根と床が正面奥にまで続く。壁はガラス張り、柱は黒い鉄骨の細い円柱。

イメージ
開放的で屋外にかなり近い屋内。明るく開放的な屋内で、建物自体が周辺と調和している。

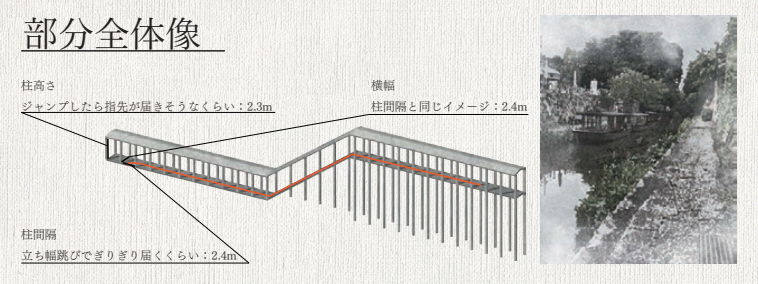
記憶
福武トレスの内観に感動した記憶がある。おそらく建築に関して、ここが一番印象に残っている場所かもしれない。

モチーフに対して、全く同じ友人たちと訪れたので、周辺環境的な面でつながりがあったと考える。

内的像 20



部分全体像



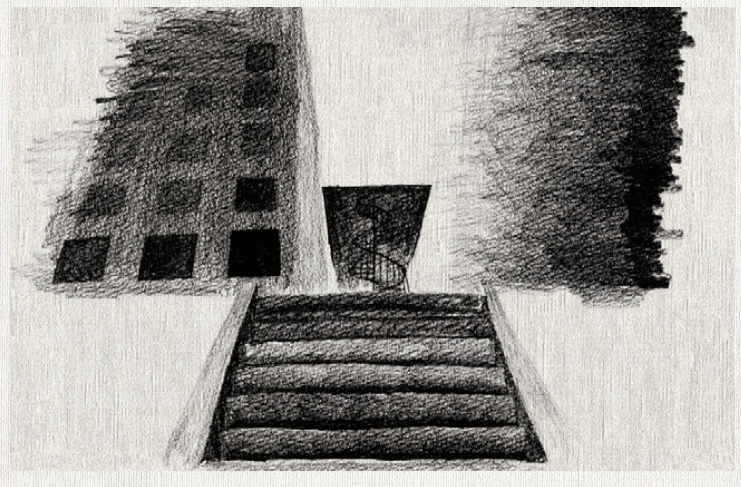
形
石の階段が手前にあり、それを下るとモルタルで作られた列柱廊が左右に続く。列柱廊の屋根は山形で厚い。

イメージ
少しのスリルと興奮を感じる。目新しさも少しあり、前に進んでみようという感覚になる。

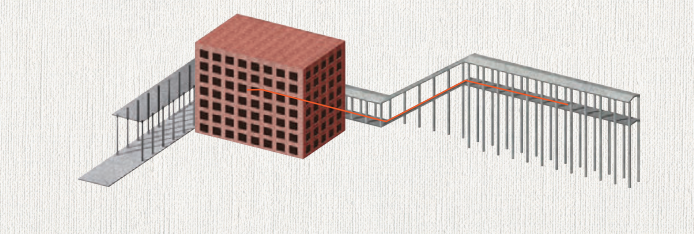
記憶
小学校の遠足で嵐山の遊覧船に乗る前や、半年ほど前に近江八幡に小学生からの友人たちと訪れた。

これまでの統合が行われており、階段の上り⇔下りの対比以外での連想は不明。

内的像 21



部分全体像



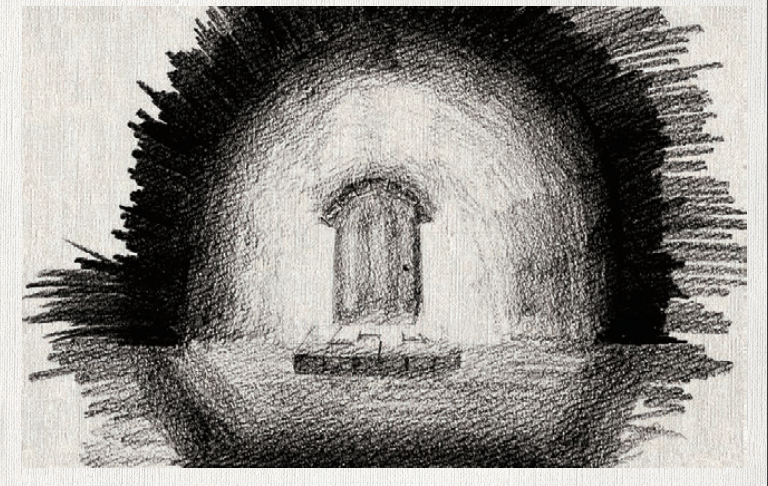
形
これまでのイメージの統合

イメージ
全体的にモダンな雰囲気。様々な素材が混同していてまとまりがないものを規則的に並べている。

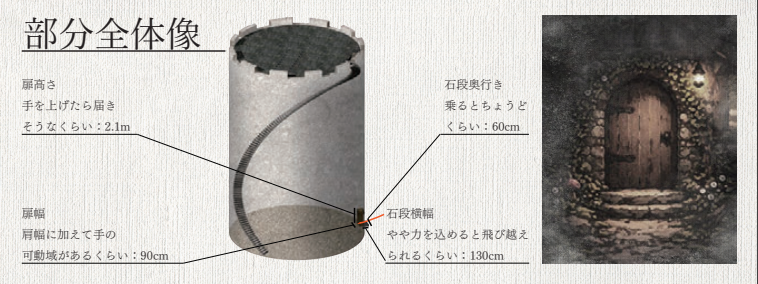
記憶
これまでのイメージの統合で、具体的なモチーフや場所は不明。

つながりは不明。

内的像 22



部分全体像



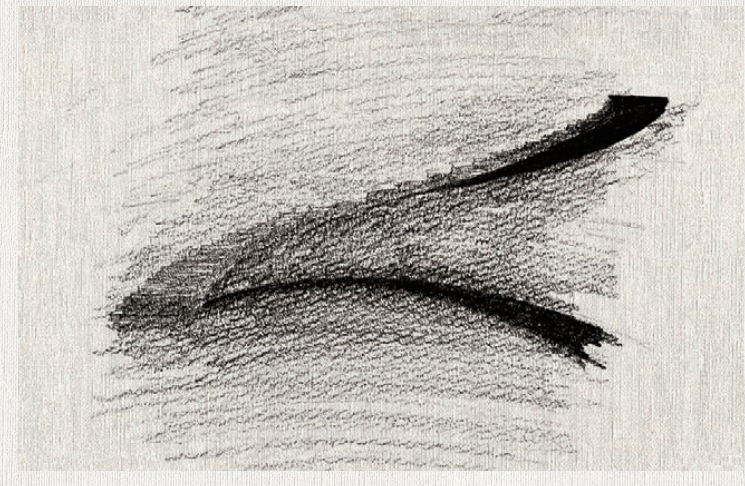
形
アーチ状の木製ドアが白い壁面についており、周囲は石レンガによる足場と円弧状の庇。

イメージ
寂れて閑散とした場所から人の温かみのある場所に入るイメージ。

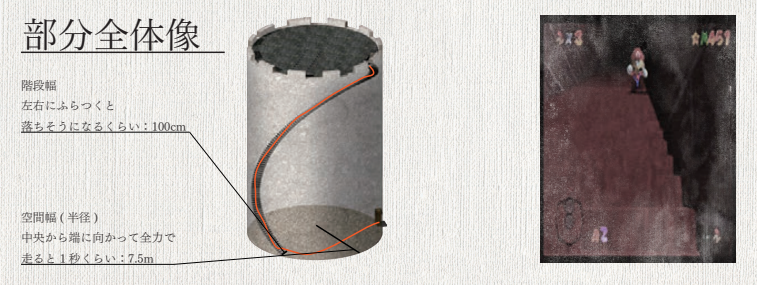
記憶
幼いころに見たような絵本や、1年前にネットで見た松濤美術館の階段に雰囲気が似ている。

ドアの形態に関して、塔という建物が連想され、さらに塔の内部シーンが連想されたと考える。

内的像 23



部分全体像



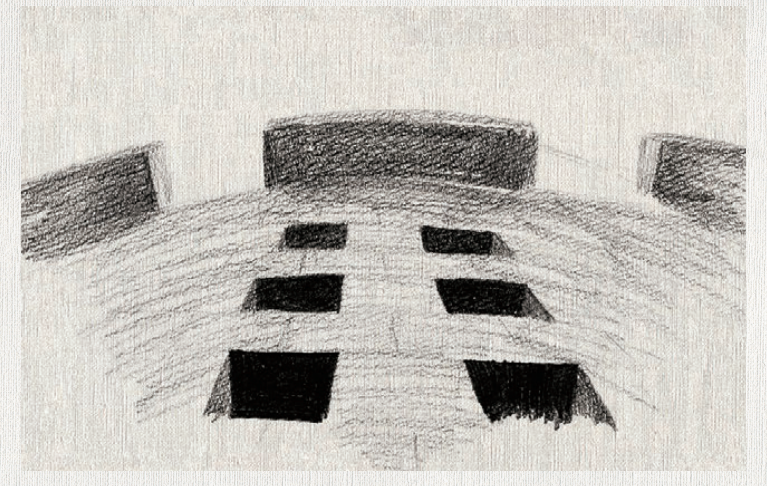
形
円柱の内部空間の壁に沿って手すりのない螺旋階段が上に上る。壁は大理石調、階段はコンクリート打ちっぱなし。

イメージ
冷たい漠然とした怖さ。焦燥感を感じる。また、逃げられないという恐怖も少し感じる。

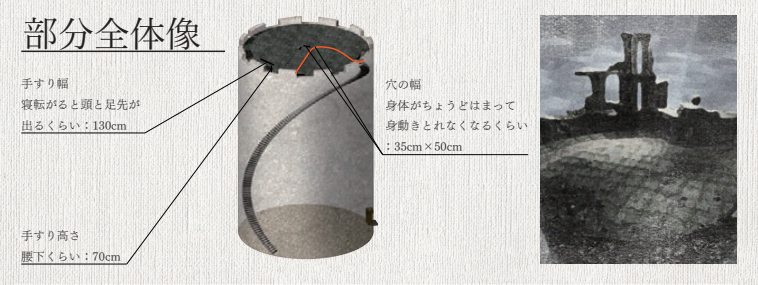
記憶
10年前ぐらいによく見ていた映画や遊んでいたゲームとある1シーンを思い出した。

焦燥感・不安→達成感・安心に心理的な移行が塔という建物イメージを通して行われている。

内的像 24



部分全体像



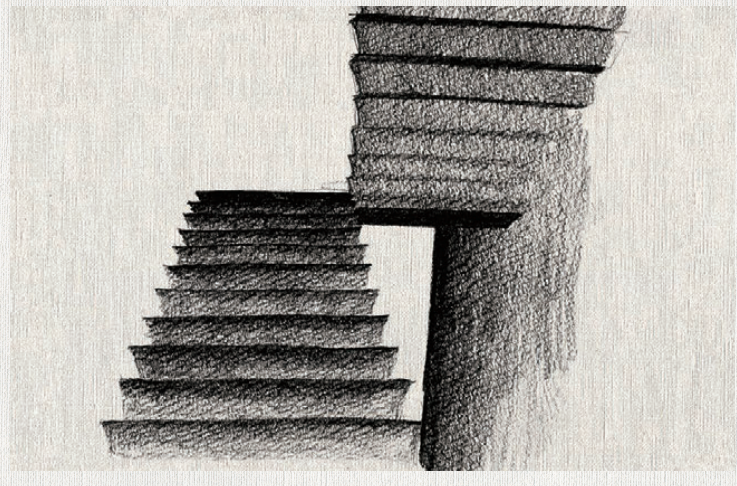
形
床の石タイルは一部が欠落。端には凹凸のある手すり壁。

イメージ
見晴らしのいい、気分のいい感覚。何かしんどいことを成し遂げた後のような達成感を感じる。

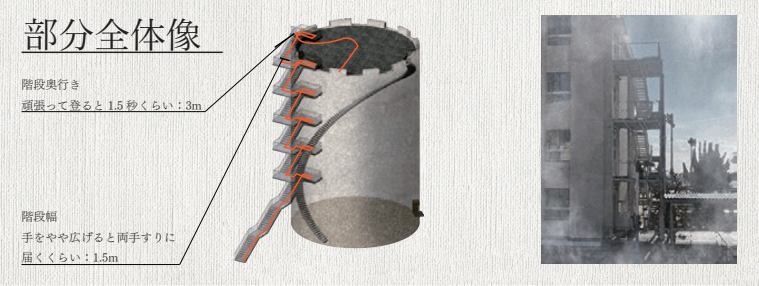
記憶
10年ぐらい前に遊んだゲームのステージは、クリアするのが難しかったが、同時に達成感を感じた。

23〜25は一連のある時期の習慣における無意識の心理的な移行で、実は時間的なつながりがあったのではないか。

内的像 25



部分全体像



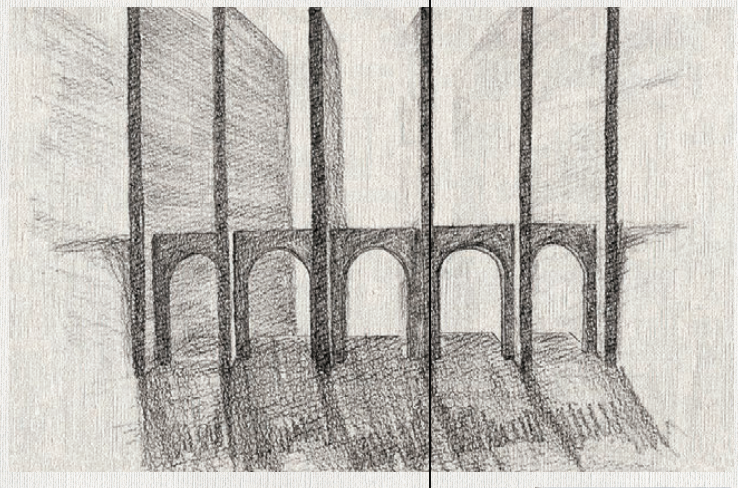
形
大理石調の壁の側面に手すりのある鉄の階段。反時計回りに下る。幅は一人分ほど。

イメージ
危なっかしさを感じつつも、若干のスリルも感じる。

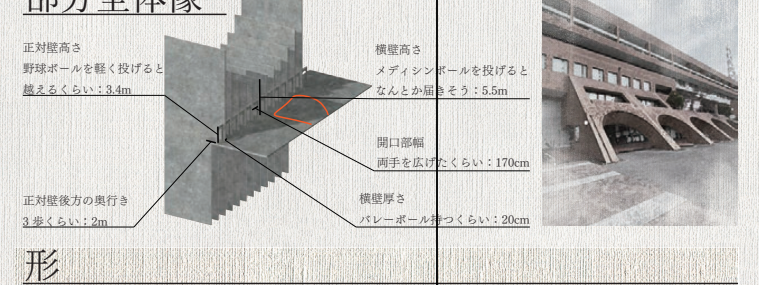
記憶
中学校の非常階段は避難訓練時にしか使用しなかったが、普段侵入できない場所に入ることができた嬉しさを感じた。

モチーフの時期における習慣とモチーフに対する心理的なイメージで連想が行われたと考える。

内的像 26



部分全体像



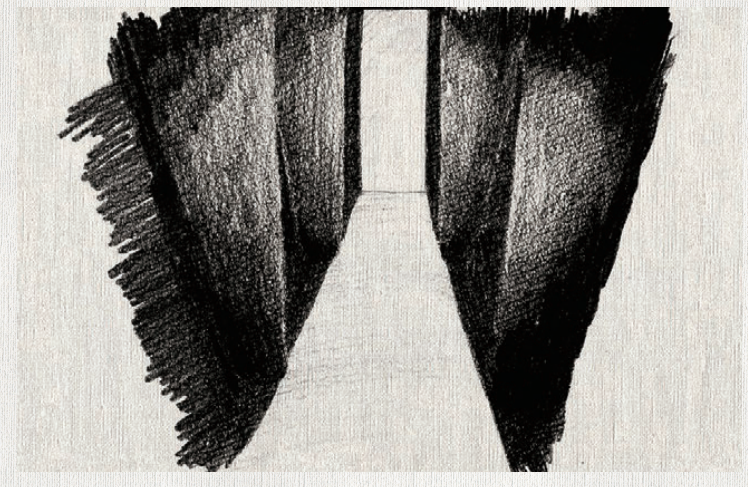
形
正対するアーチ壁を直行方向に貫通するように高くて薄い壁が立ち並んでいる。広場。

イメージ
正面の奥に太陽が沈むイメージや、閑散とした人気のない寒さを感じた。

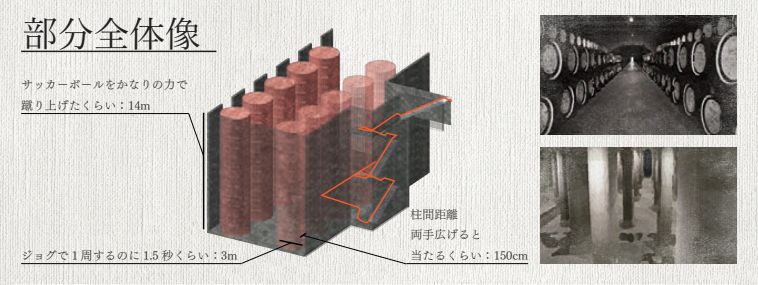
記憶
よく大学の本部前を部活後の疲労困憊の中、通って帰路についている。手前には階段があった。

どちらも記憶の時期が同じであるため、時間的な側面で連想が行われたのだと考える。

内的像 27



部分全体像



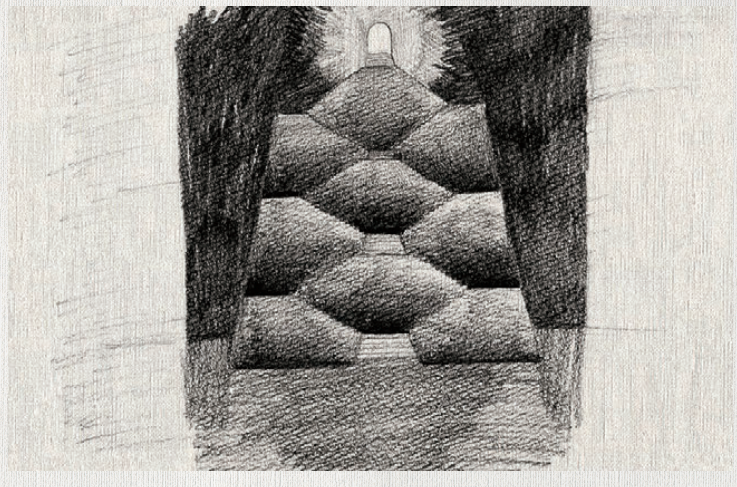
形
直径がかなり大きい柱が立ち並び、天井は高いが柱間はあまり広くない。縦筋の光が側面から差す。

イメージ
壮大でスケールの大きい感覚。暗さに対する恐怖よりも、広いのに洗練されたことに不気味さを覚える。

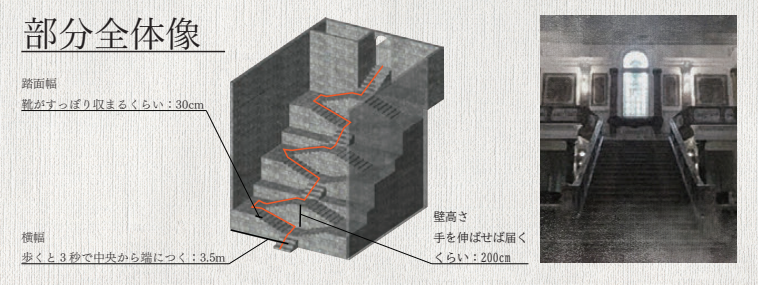
記憶
中学の教科書で見た東京の地下貯水施設や、小学生の時に見学したサントリー工場にも似ている。

空間や形態に対するイメージの類似性による連想が行われたと考える。

内的像 28



部分全体像



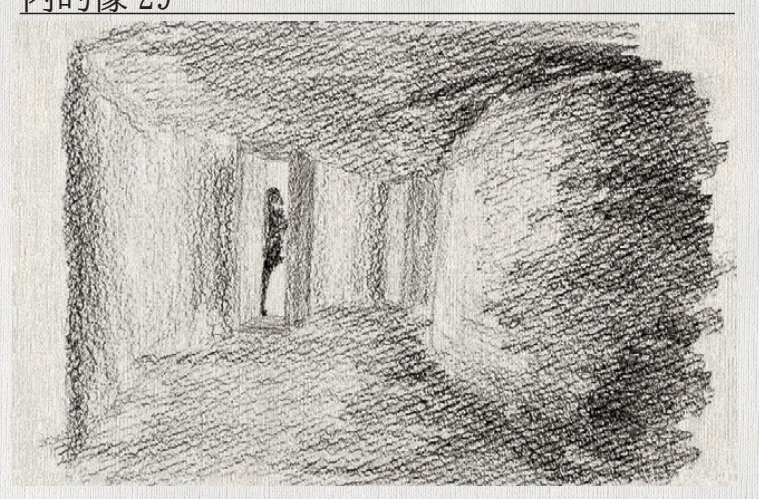
形
階段と壁が一体化している。階段は1段あたりあまり高くなく、左右にも展開している。

イメージ
荘厳さを感じる。それと同時に階段も上りたくなるような。迷いながらもなんとか辿り着く感覚。

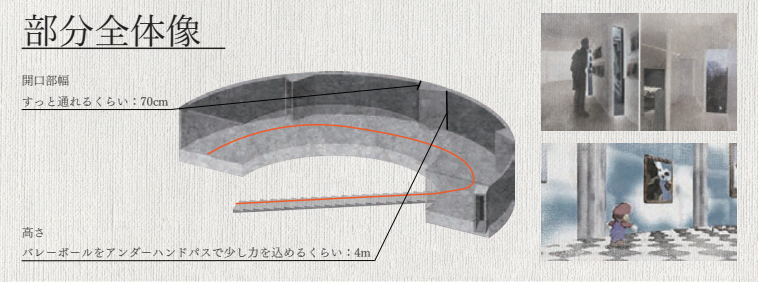
記憶
2年前に友達に紹介された名古屋市市政資料館の階段を思い出した。行ったことはない。

形や空間は大きく変化しているため、心理的な側面による連想だと考えられるが不明。

内的像 29



部分全体像



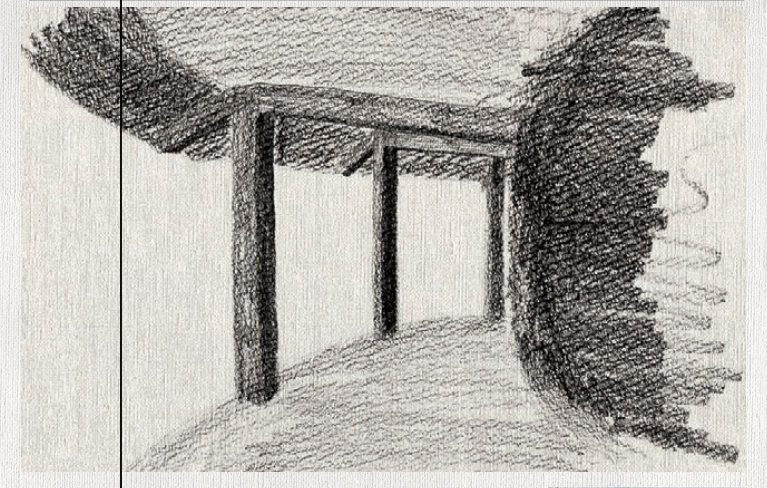
形
円形のモルタルでできた無機質な回廊の外壁に縦長の隙間がところどころ開いている。

イメージ
無機質でうす暗い中から、明るく有機的な屋外が垣間見えるイメージで、驚きや発見に近い感覚。

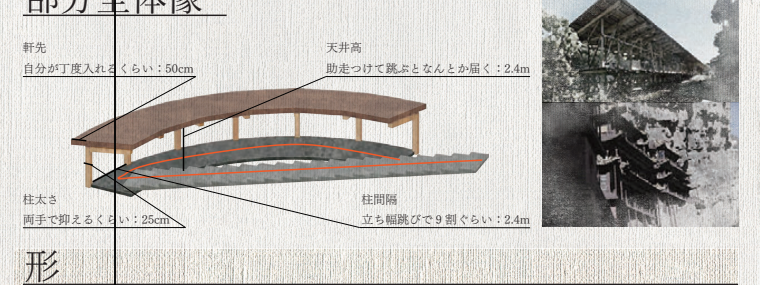
記憶
小学生時代に遊んだゲームのとある場所や、1カ月前に見たある卒業制作の部分パースを思い出した。

回廊という空間的なイメージが連想の起点になっていると考えるが、心理的な側面は不明。

内的像 30



部分全体像



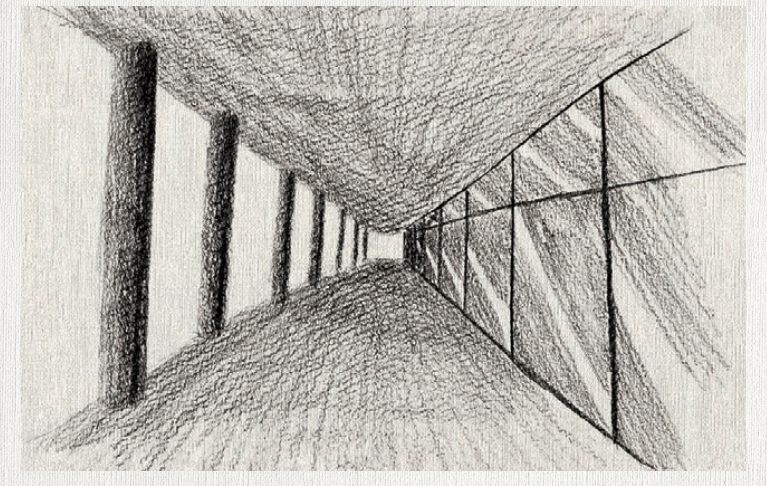
形
木の角柱の縁側空間による回廊。柱の向きは円の中心向きで柱間隔も円の角度に従う。

イメージ
安心感を得つつも好奇心も覚える。民家のような手作り感。

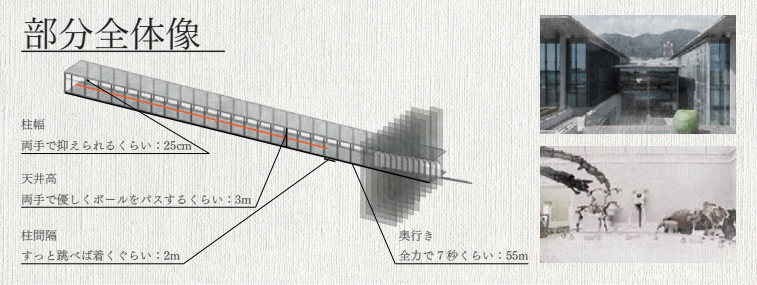
記憶
行ったことはないが、2年ほど前に見た52間の縁側を想起した。いつか行ってみたいと当時から思っている。

おそらく29のモチーフに30に対して抱くイメージが重なり、31の空間がイメージされたのではないか。

内的像 31



部分全体像



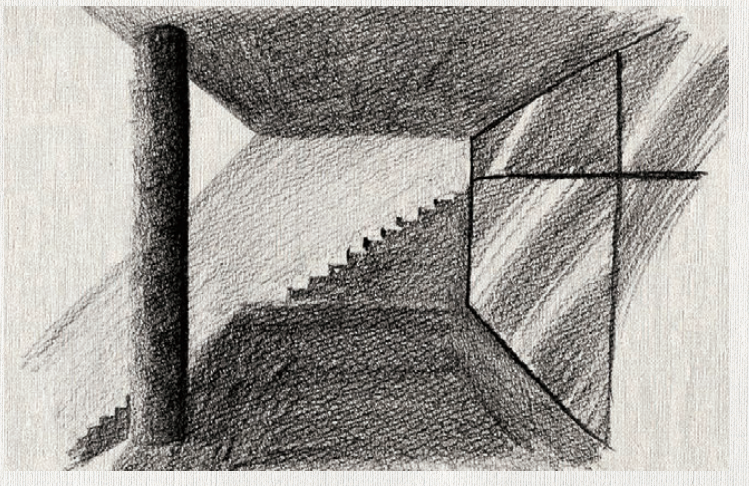
形
床・天井・柱は白いモルタルで統一。左手の柱の間からは屋外を見られるように。右手はカーテンウォールが続く。

イメージ
落ち着きや静けさと少しの期待感。ちょうど物事と物事の間の余白のような感覚。

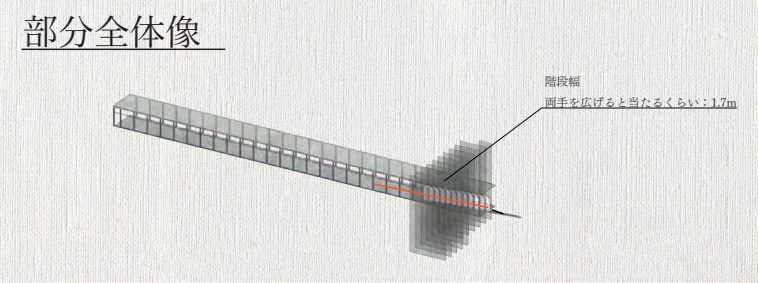
記憶
幼少期に行った徳島県立博物館や3カ月ほど前に行った兵庫県立美術館あたりを思い出した。

空間による単純な接続。奥に現れた階段は何かしらの記憶によるものだと考えるが、不明。

内的像 32



部分全体像



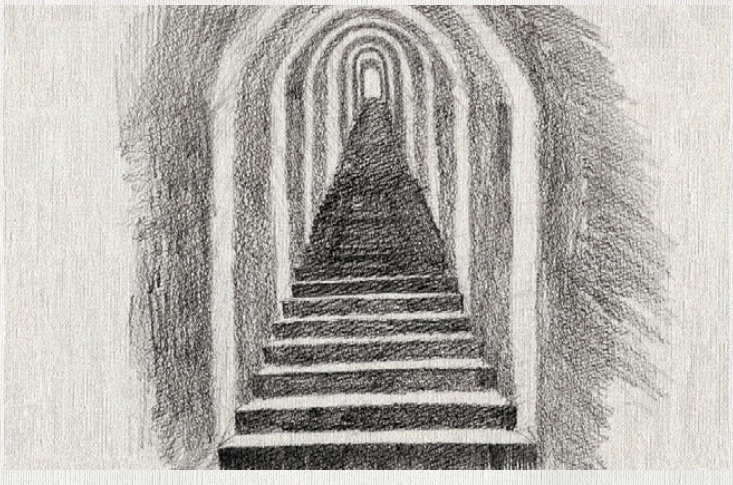
形
前回の空間の奥に右に上るコンクリート階段を配置。奥の壁はモルタル風の壁。階段は下にも続く。

イメージ
少し温かみを感じる。周囲に少し植栽を設けたらさらに洗練された空間になりそう。

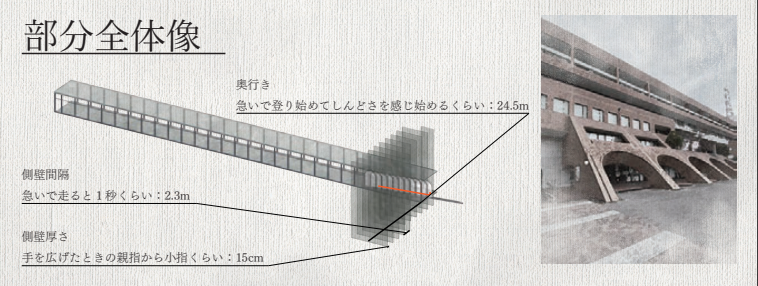
記憶
前回のシーン由来だが、具体的なモチーフや場所は不明。

階段による単純な形態接続だと考えられるが、記憶や心理的側面に関する関連性は不明。

内的像 33



部分全体像



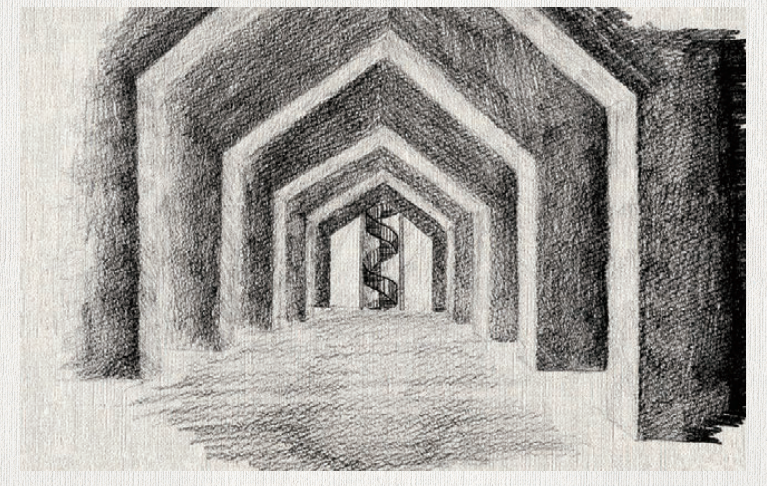
形
一人分の階段幅で、傾斜はやや急。アーチ状の開口部を複数設け、それを通るように階段を通す。

イメージ
階段の奥にある場所を求めて突き進み、アーチを気持ちよく抜け、閉塞感と解放感を交互に感じる。

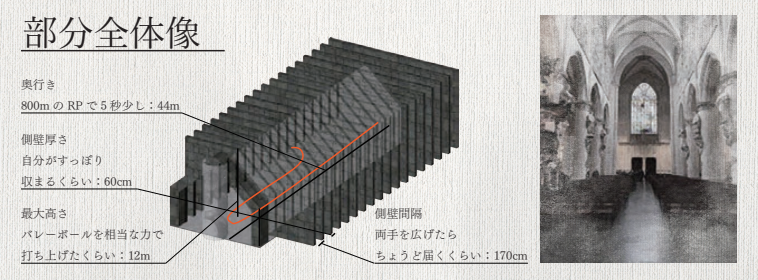
記憶
大学の本部横にアーチの開口部をもつ駐輪スペースがあり、そこを通り抜けるイメージを抱いた。

経験した時期につながりがあり、アーチをくぐるという動作と空間の変化によるつながりも考えられる。

内的像 34



部分全体像



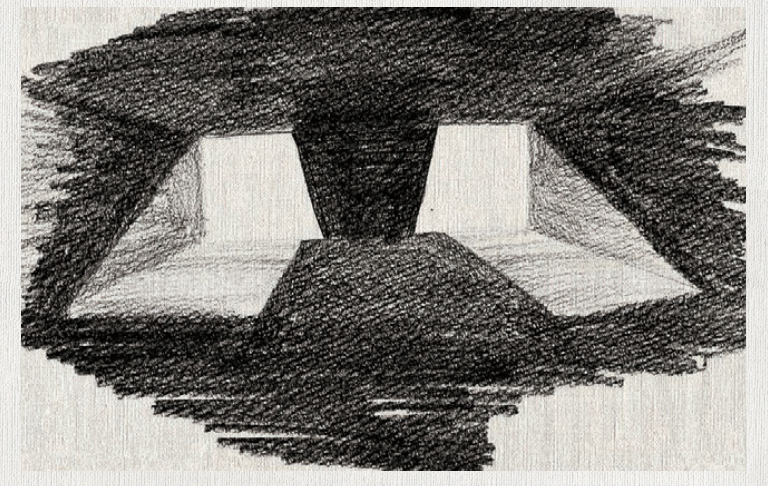
形
ハウスシェイプ状にくり抜かれた、正対する壁が連続する。中心の奥には黒い鉄骨の螺旋階段とその側壁がある。

イメージ
神聖さと懐古さ。それらに加えて寂れた感覚。朽ちた教会のような雰囲気。

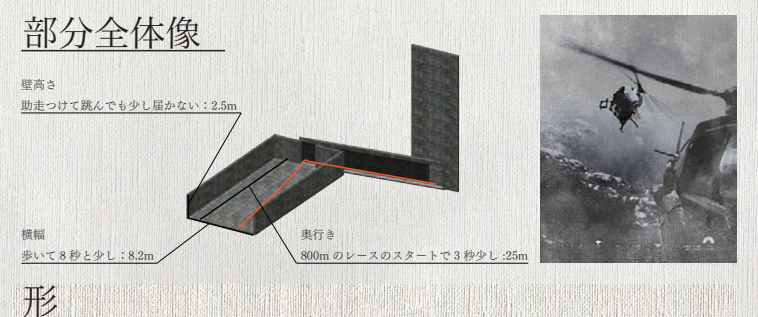
記憶
とある大学の礼拝堂コンペの際に提出された案の1つや、ホームアローンの少年が祈るシーンがフラッシュバック。

薄暗く広い空間という空間的なつながりにより、モチーフを経験した場所の上映前の薄暗い映画館が連想されたと考える。

内的像 35



部分全体像



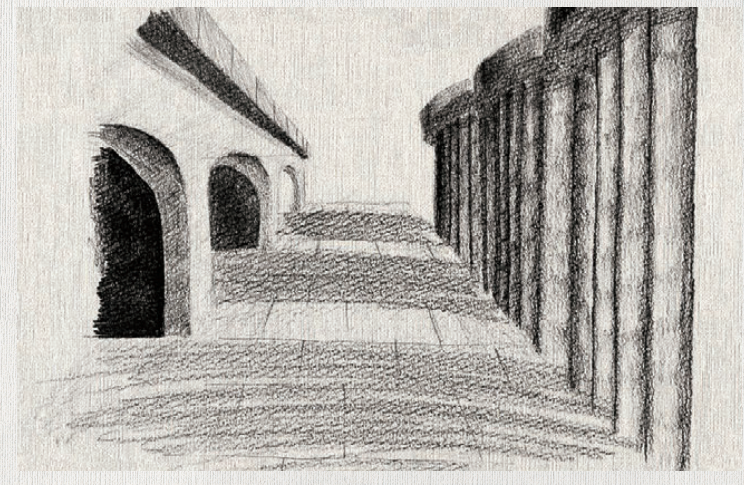
形
横長の長方形断面で正面の壁は取り払う。上から階段や屋根を下まで通し、中央の目差しをカットする。

イメージ
目先の大きな光に対しての好奇心。薄暗い場所から勇気を振り絞り出すような感覚。

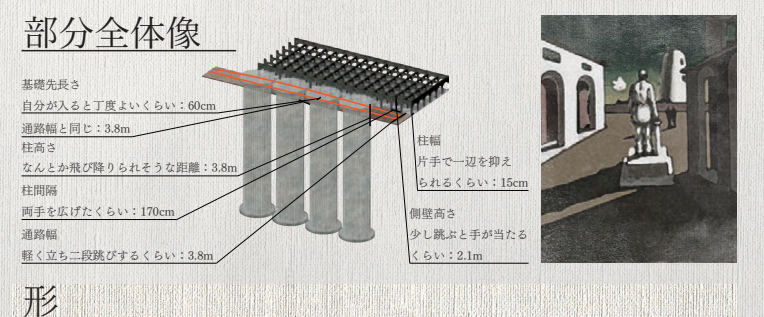
記憶
7年ほど前に見たアクション映画の1シーンで輸送用ヘリの後ろから飛び降りる場面を思い出した。

現実との乖離という心理的なイメージを起点に連想が行われたと考える。

内的像 36



部分全体像



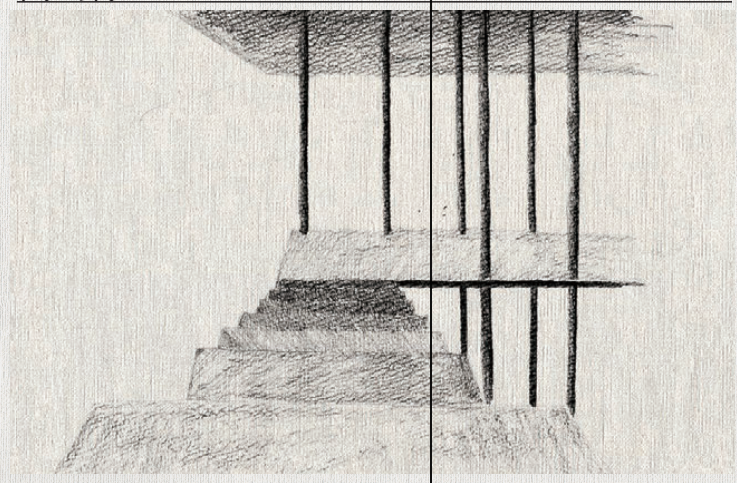
形
左側には頭上ぐらいのアーチ壁を縦横に連立し、右側には半径が大きいドリス式風の巨大柱を連立する。

イメージ
左右でスケール感覚がおかしくなり、絵の中にいるような不気味さを感じる。

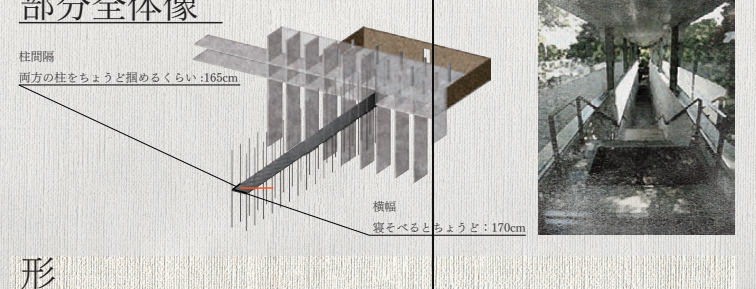
記憶
2カ月ほど前に見たデ・キリコの作品のような構成で似ていると感じた。

中世⇔現代の空間的な対比が起こっているが、連想の起点となった心理的要因は不明。

内的像 37



部分全体像



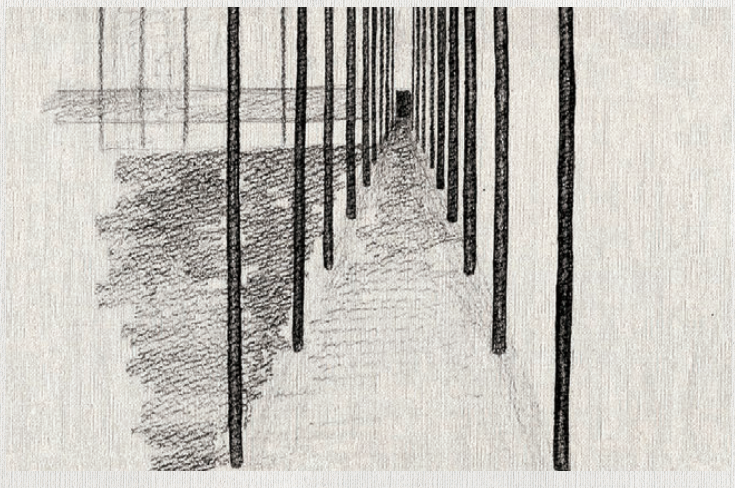
形
コンクリートの踏面が広く蹴高が低い階段とその先に鉄骨の薄いスラブ床を吊り下げるように細い円柱を通す。

イメージ
洗練されたイメージで無駄がそぎ落とされたように感じる。この下が池や川なのをイメージした。

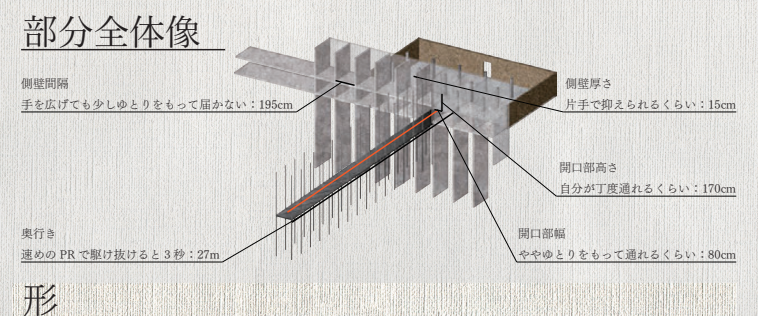
記憶
大山崎山荘美術館の増築部や福武トレスを思い出し、洗練さと空間の調和している様子が浮かんだ。

単純な形態接続と垂直性と水平性に富んだ空間がさらに強調された。しかし、イメージは反転している。

内的像 38



部分全体像



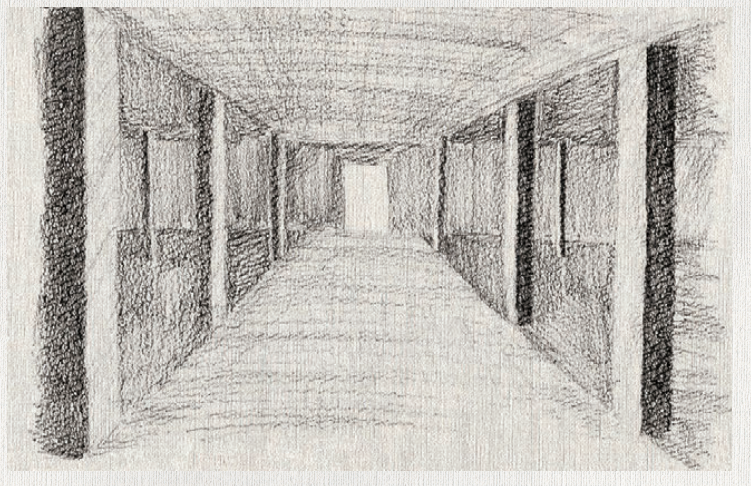
形
前回のシーンに加え、正面に塗装された壁を水平・垂直に分割するコンクリート壁が正対する。

イメージ
不穏感。前回のシーンよりも不安定さや静寂の恐怖のようなものが立ち込めている。

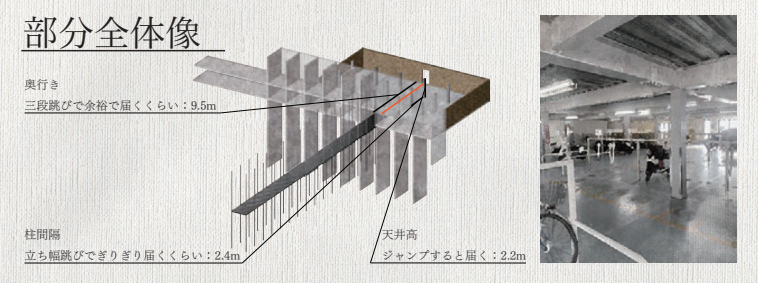
記憶
前回のシーン由来だが、具体的なモチーフや場所は不明。

不穏感や漠然とした恐怖でつながりがみられる。形態としては鉄骨が用いられている。

内的像 39



部分全体像



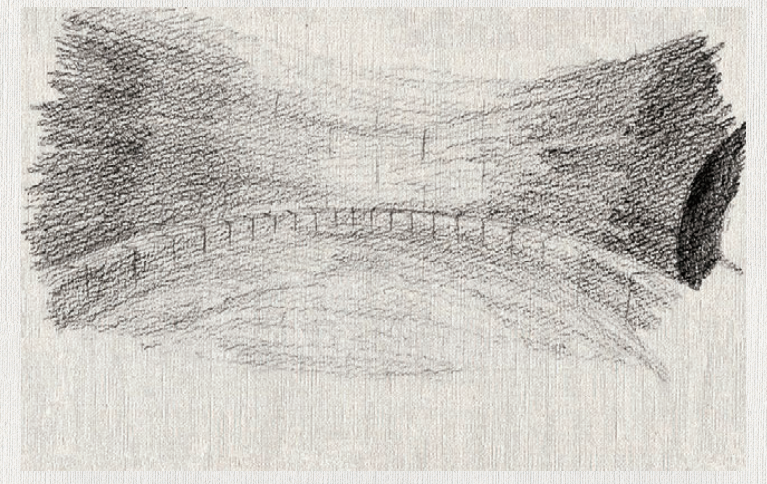
形
黄色味を帯びた下地のような壁で、空間内にはH形鋼の柱が理路整然と並んでいる。左右には広く、奥行きは狭い。

イメージ
人がいるような、いないような不穏な感覚。全体的にうす暗く、時がとまっているようなイメージ。

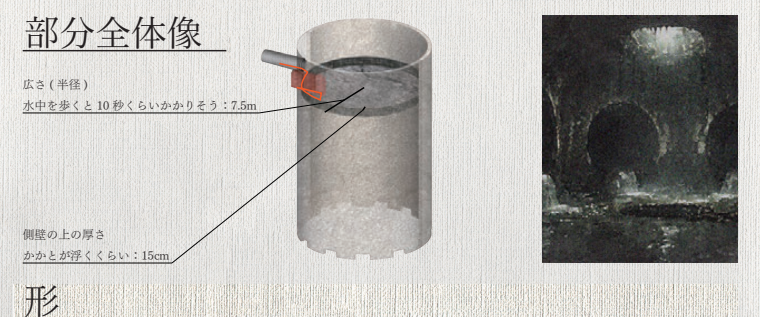
記憶
中学生まで時々利用していた近所の駅の立体駐輪場のような不気味な空間を思い出した。

不気味で暗い空間のつながりがあり、モチーフの時期もおおよそ一致しているので時間的なつながりも考えられる。

内的像 40



部分全体像



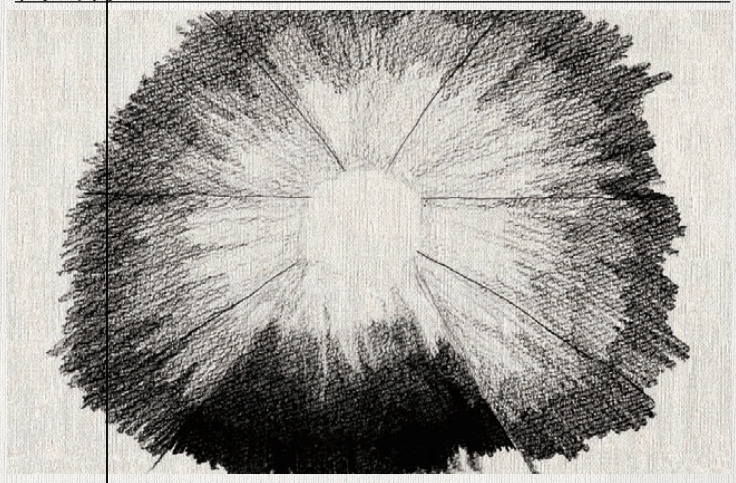
形
中央に水盤があり、その枠には足を置ける程度の厚さの塀がある。他にも円形の穴が開いている。上は閉じている。

イメージ
この場所自体には何もいないが、他の場所からここにやってきそうな現れる恐怖がある。

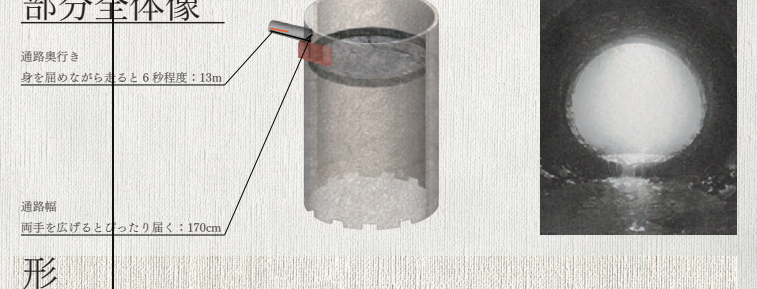
記憶
小学生のころ観たハリー・ポッターや何かのホラー映画の1シーンであったような気がするが不明。

恐怖→逃避という心理的な移行を地下水路という空間を通して連想している。

内的像 41



部分全体像



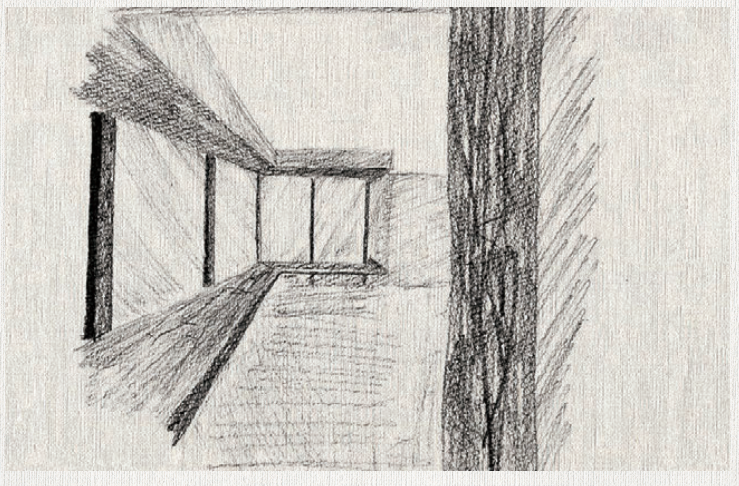
形
円形の断面で幅は一人分。コンクリートが素材。足元は水で満ちている。

イメージ
後ろから迫る得体のしれない恐怖から逃げようとしているイメージ。そして出口が見えた安心感。

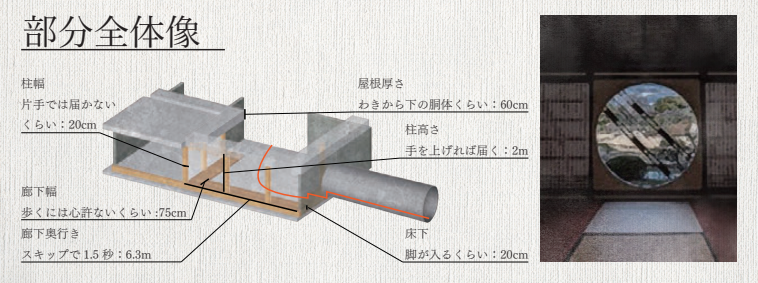
記憶
名前は忘れたが、6年ぐらい前に見たホラー映画の最後の脱出シーンとかなり似ている。

水路の円形と後楽園の茶室の丸い開口部を起点として逃避→安心の精神的連想が行われた。

内的像 42



部分全体像



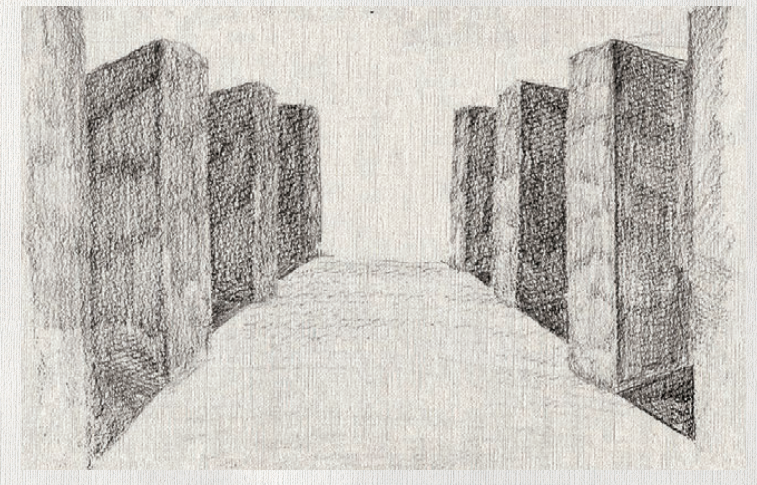
形
木の縁側の廊下、ガラス張り、コンクリートの屋根で中央を囲み、縁側の廊下は張り巡らせて奥行き出す。

イメージ
冷たい安心感を覚える。また、洗練された感覚や無駄のなさという点では、和風なモダニズムに近い印象。

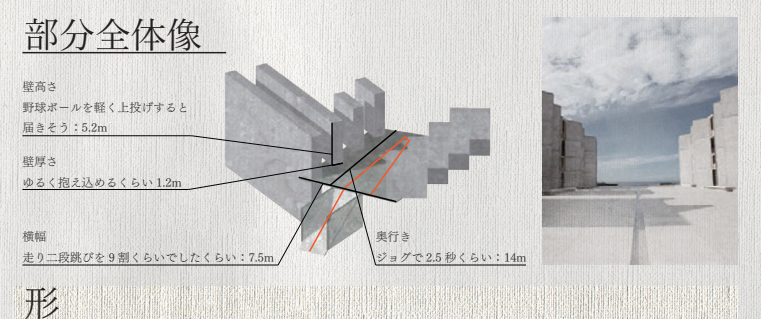
記憶
3年前に訪れた後楽園の茶室。ここでは部活動などによる忙しい日々の合間を縫って訪れた束の間の休息だった。

モダニズムという言葉が前反省的に立ち上がり、それを起点とした連想が行われたと考える。

内的像 43



部分全体像



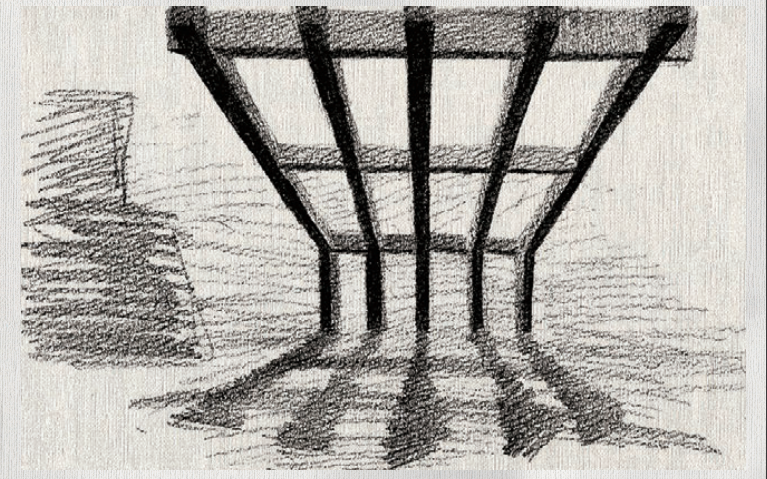
形
中央は開けさせ、左右に厚みのあるコンクリートブロックの壁を斜めにこちらを向くように配置する。

イメージ
全体的に屋外なのにうす暗い雰囲気。荒波や凍える冬を想像する。視線が集まるような感覚。

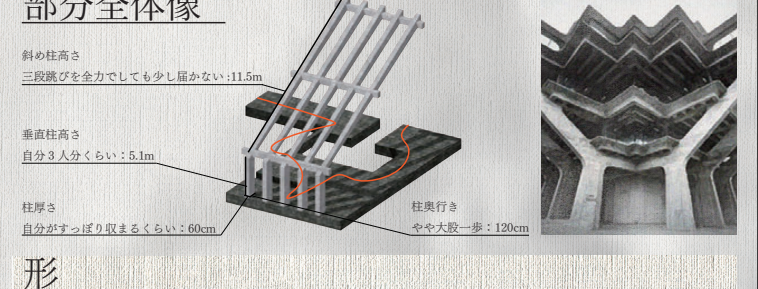
記憶
ソーク生物学研究所に類似しているが、2年前に授業で少し聞いた程度だったがイメージされた。

強固で冷たいコンクリートの形態を起点に、それに関する時間的な連想が行われたのではないか。

内的像 44



部分全体像



形
5本の太いコンクリートの柱が垂直に伸び、途中で折れ曲がり、覆いかぶさるように配置。

イメージ
無機質で冷たいものが緊迫感を醸し出しているようで、壮大で近未来的な印象を受けた。

記憶
2年ほど前に買った本に掲載されていたガイゼル図書館のファサードに似ている。